

人文科学研究

—第 15 号—

目次

- ◆2017 年度修了者修士論文題目..... 1

- ◆2017 年度修了者修士論文要旨..... 2

- 『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』研究
原撰本系『類聚名義抄』の片仮名和訓について
マルモンテル研究

- ◆2017 年度修了者修士論文..... 5

- アルベール・カミュ研究
A Cognitive Approach to English Education
: A Study on Participial Construction

- ◆院生会組織 103

- ◆2017 年度院生会活動記..... 104

平成 29 年度信州大学大学院人文科学研究科 修士論文題目

【言語文化専攻】

『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』研究

15LA102F 鈴木映梨香

原撰本系『類聚名義抄』の片仮名和訓について

15LA106B 矢澤静佳

アルベール・カミュ研究

15LA107G 久保陽子

マルモンテル研究

16LA101A 石川萌理

A Cognitive Approach to English Education : A Study on Participial
Construction

16la102K 伊東勇人

『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』研究

鈴木 映梨香

本論は、『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』（以下『地蔵十王経』）の成立と展開、享受のあり方を考察することによって、日本における十王信仰の展開の諸相を明らかにしようとするものである。

『地蔵十王経』は、日本における十王信仰の礎とされる。本書をもとに様々な注釈書や翻案書、十王図などが制作され、十王信仰の展開に大きく寄与したためである。しかし、本書の伝本および本文研究は十分とは言い難い状況にあり、本書が及ぼした影響について論じる以前に、『地蔵十王経』自体の総体を把握することが必要である。

よって本論では、現存伝本の系統分類および本文の解釈によって『地蔵十王経』の成立と展開について明らかにすることを目的とする第1部と、『地蔵十王経』の影響が認められる文献・絵画資料をとりあげ、『地蔵十王経』の享受のあり方を明らかにすることを目的とする第2部によって、『地蔵十王経』および十王信仰の展開の諸相を明らかにすることを試みた。

第1部第1章『『地蔵十王経』の伝本研究』では、現存する『地蔵十王経』の伝本25本は、写本系（Ⅰ類）と版本系（Ⅱ類）の二つに大別できることを確認した後、本文異同によって、Ⅰ類→ⅡA類→ⅡB類→ⅡC類の順に展開したことを明らかにした。

第1部第2章『『地蔵十王経』の本文研究』では、典拠との比較や本文解釈によって、『地蔵十王経』は「閻魔王＝地蔵菩薩」を中心として構成されていること、および「追善供養の勧め」を編纂意図として持つことを明らかにした。

第2部第1章『『地蔵十王経』の注釈書』では、室町時代の注釈書を2本とりあげ、当時の経典解釈のあり方に則って多数の文献を引用し、『地蔵十王経』を理解しようとする「逐語的な注釈」と、独自の解釈に基づき、必要と思われる少数の文献からの引用をもって『地蔵十王経』を理解しようとする「粗述的な注釈」という、二つの注釈書のあり方が存在することを明らかにした。

第2部第2章『『地蔵十王経』の図像化』では、『地蔵十王経』の影響がみられる鎌倉時代から江戸時代の絵画資料7つをとりあげた。特に、経典本文に挿絵を付加することで、絵によって注釈を施したといえる『地蔵十王経』版本の成立は、十王図にも影響を及ぼし、十王信仰の展開に大きく寄与したといえることを明らかにした。

以上の分析より、『地蔵十王経』は、平安時代末期の成立から江戸時代にかけて、宗派の枠を越えて幅広く享受され続けてきたことを確認し、十王信仰の展開の諸相の一端を明らかにした。

原撰本系『類聚名義抄』の片仮名和訓について

矢澤 静佳

本論は、原撰本系『類聚名義抄』（以下『名義抄』）の片仮名和訓について、二つの観点から考察を加えることで、『名義抄』成立当時の学問の在り方そのものについて論究したものである。『名義抄』研究で重視されている典拠主義という性格を利用し、第二章では「典拠」という観点から、また片仮名和訓の淵源である漢文との関わりを利用し、第三章では「漢文との接点」という観点から、考察を行った。

考察に入る前に、第一章ではまず、利用し得る訓点資料の整理を試みる。和訓の源流は訓点資料に求められる。『名義抄』の片仮名和訓を考察するためには、訓点資料を避けて通ることはできない。しかし訓点資料原本の閲覧は難しく、影印本や複製本を用いた調査が主となることが見込まれる。そこで本論では、古辞書に見られる和訓を考えるにあたり、どれほどの訓点資料が利用し得るか示すために、影印本、複製本の刊行状況を確認する。572点という多量の文献を挙げる『訓点語彙集成』と、精選された文献を挙げる『訓点語辞典』を基に、国立国会図書館蔵書検索システム等を利用して調査し、訓点資料621点の内、125点の資料に於いて影印本、複製本が刊行されていることを示した。また訓点資料研究の泰斗、築島裕博士による『訓点語彙集成』について、利用する際の注意点を述べた。

第二章では、「典拠」という観点から片仮名和訓を考察する。現在、典拠の表示方法の曖昧さにより、出典表示方法について相反する二つのアプローチによる見解が提示されている。しかしどちらの見解に対しても検証の不足、議論の不足が残ることを示し、また典拠主義を前提とする先行研究に対する疑問として、片仮名和訓部分における典拠主義の意義について述べる。中国の文献より情報を引用する漢文注部分とは異なり、和訓という邦人による情報の典拠を示す、その理由が解しづらいことから、片仮名和訓部分においては出典明示の姿勢がとられていなかった可能性を提言し、『名義抄』成立当時の片仮名和訓の価値について試論を提示する。

第三章では、「漢文との接点」という観点から、『名義抄』の片仮名和訓部分で、典拠が漢籍に集中する理由を考察する。まず当時の加點状況を確認し、環境的要因が理由ではないことを指摘する。先行研究で指摘される、仏書の訓点資料が利用できないという技術的要因も疑問が残ることを示す。また考えられる可能性として、訓点の量による選択の結果を挙げたが、これも疑問が残り首肯し得ないことを述べた。訓点の質による選択の結果という可能性については、先行研究で述べられるような、典拠自体のオーソリティーの保証としての「典拠性」ではなく、典拠に見られる和訓そのものの質の保証としての「典拠性」、小学的権威性を確認する必要性を論じた。そして漢字注という小学的権威を本文内に持つからこそ、漢籍では典拠のある和訓が豊富に生まれるため、漢籍が採用されるという仮説を提示する。そしてこれを検討するために、漢字注と和訓のかかわりについて『文選』と『色葉字類抄』を用いた調査を行う。当初設定した相対的視点では方法論的に問題が残ることを述べ、相乗的視点を導入することを提言する。この視点から考察することで対象とする全ての例について、漢字注と和訓とに関係を認めることが可能となる。漢文と和訓との接点として、「小学的権威としての漢字注」を据え、和訓発生プロセスを考えることで、『名義抄』片仮名和訓の典拠が漢籍に集中するその理由を説明することが可能となることを指摘する。

マルモンテル研究

石川萌理

ジャン＝フランソワ・マルモンテル（1723－1799）は18世紀フランスの小説家、劇作家、詩人であり、また百科全書派の一人である。マルモンテルは日本においてはほとんど知られておらず、また、現代のフランスにおいても著名な作家とは言えない。生前の評価は高かったものの、マルモンテルの名はフランス革命以降、急速に忘れ去られてしまったからだ。しかし18世紀当時、百科全書派の一人として『百科全書』*L'Encyclopédie*に記事を寄稿し、フランスのみならずヨーロッパ全土でその名声が知れ渡り、国内外でベストセラーとなる作品を世に出したこの作家の影響力は非常に大きかったのである。

本論は、彼の書いた叙事詩的小説『インカ帝国の滅亡』における作者の意図について明らかにしようとするものである。『インカ帝国の滅亡』（1777）は、16世紀スペインによる新大陸征服を背景に、ラス・カサス、ピサロなど実在の人物を登場させながら、スペイン人の若者アロンソという架空の主人公がスペインから離反してインカ帝国の側に加勢して戦い、インカ帝国とともに悲劇的な運命を共にする物語である。スペインの南米侵略からすでに200年が経過していた18世紀フランスにおいて、ラス・カサス（1484－1566）の『インディアスの破壊についての簡潔な報告』を読んでインディアンの歴史に心を動かされたマルモンテルは、過ぎ去った彼らの悲劇的歴史に再び光を当てると同時に、プロテスタントに不寛容であった当時のフランス社会に対して、南米侵略と共通する罪である「狂信」を告発しようとして試みている。この作品は、マルモンテルが前作『ベリゼール』（1767）で市民の宗教の自由を説いたことでソルボンヌによって非難されたことをきっかけとして生み出され、前作よりも普遍的で広い主題を取り扱った作品である。本論では、この作品における作者の意図を探るにあたって、作品の序文を手がかりとした。序文ではマルモンテル自身が作品の意図や目的を開陳しており、作品理解に当たって見逃すことのできない部分である。しかし、1777年初版序文には、邦訳の底本となっている1819 - 1820年ブラン版で削除されてしまっている箇所があることが判明した。この初版序文には「インディアンの擁護」と「より多くの人々のため」というマルモンテルの作品制作において重要な意図が見受けられる。彼のこの意図をふまえて、本論では『インカ帝国の滅亡』の主題について再検討し、マルモンテルが提示した「狂信」という問題について改めて分析を行った。また、『インカ帝国の滅亡』の出版後の評価は、予想より良いものではなく、マルモンテルは失望している。しかし、この作品はシャトーブリヤンやミツキュービッチといった作家のみならず南米の革命家たちに影響を与えたことが明らかになっている。『インカ帝国の滅亡』は、時に物語が冗長で教訓的すぎると批判がなされることも事実である。しかし、マルモンテルは物語という形で多くの読者を楽しませながら、人間の歴史に繰り返される問題を提示している。こうしたことから、『インカ帝国の滅亡』は時代と場所を越えて感銘を与える作品となっているのではないだろうか。

平成 29 年度 修士論文

アルベール・カミュ研究

信州大学大学院人文科学研究科言語文化専攻
15LA107G 久保 陽子

目次

序論	7
<hr/>	
第1章 ムルソーとママンの関係	
<hr/>	
(1) カミュの言葉	12
(2) ムルソーとママンの関係—埋葬の日—	14
(3) ムルソーの罪悪感	17
(4) ムルソーの自己正当化	20
第2章 ムルソーの罪悪感	
<hr/>	
(1) 裁判—罪人であると知ること—	24
(2) 裁判—ムルソーの死刑判決—	29
(3) ママンの考え	34
第3章 ムルソーとママンのつながり	
<hr/>	
(1) ママンへの理解	38
(2) 世界の優しい無関心	44
(3) 「ルイ・ランジャール」における母子関係	48
(4) 『異邦人』における母子関係—もうひとつの解釈の可能性—	54
結論	57
<hr/>	
参考文献	59
<hr/>	

注記

・ 翻訳にあたっては、既訳を参考にさせていただいた。

・ Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, « Bibliothèque de la Pléiade »

Gallimard, 2006. から引用する際は、ページ数の後に作品名を括弧内に記した。なお、何も記していない場合は、*L'Étranger* からの引用である。

序論

アルベール・カミュ (Albert Camus 1913-1960) は『異邦人』(1942) 出版以前の作家としての修練期、自分の生まれ育った貧民街、母そして家族を題材にした自伝的な作品を多く書いていた。それらはエッセーという形式で書かれており、「勇気」(1933年に執筆)、「貧民街の施療院」(1933年に執筆)、「貧民街の声」(1934年に執筆)、『裏と表』(1934年に執筆)を挙げることができる。また1934年から36年の間に、「ルイ・ランジャー」 という小説も書いていた。しかしその形式の稚拙さゆえに、カミュはこの小説を途中で放棄してしまっている。これらの自伝的作品のうち、『裏と表』のみ1937年にアルジェのシャルロ社で少部数出版している。

カミュは、1935年5月の日付がある『手帖』(1962)で、次のように述べている。

L'œuvre est un aveu, il me faut témoigner. Je n'ai qu'une chose à dire, à bien voir. C'est dans cette vie de pauvreté, parmi ces gens humbles ou vaniteux, que j'ai le plus sûrement touché ce qui me paraît le sens vrai de la vie.¹

自分は証言しなければならない、すなわち、実体験を書かねばならないのだ。自分が書くべきものとは「人生の真の意味と思えるもの」であり、それはカミュがその青年期まで暮してきた貧困の生活において感じられたものであるのだ。ゆえに実体験を書くにふさわしい形式であるエッセーを選択したのだった。

ところでそうした貧困の生活を象徴しているのは、カミュの母の母なのである。

Elle était le reflet de cette misère autrefois si dure, maintenant comprise et jugée à sa valeur.²

母その人自身が、貧困の反映なのである。つまり、カミュはその母を描かなければならないのだ。

また、カミュは『裏と表』の出版後に友人に書いた手紙の中で、『裏と表』について、次のように語っている。

J'ai beaucoup travaillé ces choses mais toujours avec une manie de *nudité* qui me desséchait moi-même.³

¹ Albert Camus, *Carnets I : mai 1935 — février 1942*, Gallimard, 2013, p.11.

² Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, « Bibliothèque de la Pléiade » Gallimard, 2006, p.91. (以下 *ŒUC*, I と記す。) (*Appendices de « L'Envers et l'Endroit »*, Louis Raingeard から引用)

³ *ŒUC*, I, p.97. (*Appendices de « L'Envers et l'Endroit »*, *Lettre à Jean de Maisonseul* から引用)

カミュは物を書く際に « *une manie de nudité* » を持っていたのである。

しかしそれは作家にとって、創造の妨げになってしまうものであるだろう。ゆえに、芸術作品と呼べるものを制作するために、カミュは赤裸々な自伝的作品から離れ、小説を描くようになるのである。

しかし、小説や戯曲、例えば『異邦人』、『誤解』（1944）、『ペスト』（1947）といったこれらの作品のすべてで、カミュは母を描いているのである。つまり、カミュは赤裸々な自伝的作品を描いていた修練期以後も、虚構作品を通して母というテーマをずっと描き続けたのである。

そして『裏と表』出版から約 20 年後の 1959 年、ほぼ自伝といってもよい内容の、しかし小説形式である『最初の人間』（1994）を執筆し始めるのである。そこでは、カミュの母は勿論、自分の生まれ育った貧民街、家族が前面に出され描かれている。しかし、1960 年の交通事故によりカミュは亡くなってしまう。ゆえにこの小説は未完となってしまったのだ。残された『最初の人間』の補遺のノートに、母について書かれた以下のような言葉がある。

・・・elle・・・qui pourtant avait gardé intacte une vérité qu'il avait perdue et qui seule justifiait qu'on vive.⁴

カミュ最後の作品である『最初の人間』においても、その修練期に述べていたように、母は真実性を体現する人物として描かれるのである。そうしたカミュの母の真実性は、カミュがずっと描き続けてきたものであるだろう。つまりカミュにとって、その作家人生の始まりから終わりまで、母は描くべきもの＝“真実性”を体現する人物であり続けたのだ。

本稿では、カミュの作品における母という膨大なテーマの糸口として、カミュの最初の小説である『異邦人』を取り上げた。『異邦人』における母子関係とはどのようなものなのか？ これを解き明かすことが本稿の目的である。

⁴ Albert Camus, *Le Premier Homme*, Gallimard, « Cahiers Albert Camus 7 », 1994, p.320.

本研究は『異邦人』における母子関係を解き明かすことを目的とするのだが、その際、自伝的作品である「ルイ・ランジャール」を参考としている。「ルイ・ランジャール」とはジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシイが草稿研究によって明らかにした、カミュの最初の小説草稿である。レヴィ＝ヴァランシイはそれを1980年に博士論文の中で発表し、また、それは2006年に刊行された新プレイアッド版に『裏と表』の補遺として収録されている。

ところで、「ルイ・ランジャール」とカミュの遺稿となった『最初の人間』の間には、その内容にいくつか類似した点が見受けられるのである。このことは、「ルイ・ランジャール」がカミュの創作の核となる部分を担っている作品であることを示しているだろう。しかし「ルイ・ランジャール」は未だ知名度が低く、取り上げている研究者は多くない。ゆえに、

『異邦人』を研究するにあたって、「ルイ・ランジャール」を参考に『異邦人』の母子関係を読み解くという試みにより、『異邦人』読解に、カミュの創作の核心に迫った、新たな光を当てることができると考えられるのである。

本論に入る前に、「ルイ・ランジャール」のどのような点を参考にしたかを示しておきたい。

「ルイ・ランジャール」には、『異邦人』に描かれているエピソードと非常に類似したエピソードが見られるのである。それは、“ムルソーが母を養老院へ入れた”というエピソードである。「ルイ・ランジャール」においてこのエピソードは、以下のように描かれている。主人公のルイ・ランジャールは17歳の時、当時は不治の病であった結核に罹るのであるが、母はその際に、無関心な態度しか示さなかった。息子を失うかもしれない恐怖や絶望という感情を表さなかったのだ。ルイの家は貧しかったので、治療のために金のある叔父の一人が彼の世話を引き受けることになる。母はルイの世話をしなかったどころか、しまいにはルイの病気に関心さえ持たなくなったのである。

本研究では、これと類似した、“ムルソーが母を養老院へ入れた”というエピソードが、『異邦人』において重要な意味を持つものだと考えた。ゆえに、本稿ではこのエピソードに注目し、ムルソーが養老院へ母を入れたことに対して持っている罪悪感と、ムルソーがそのことを正当化する言説を詳細に検討し、その行方を追っている。

なお、本研究においては、あくまで『異邦人』という虚構作品における母子関係を探ることを目的とすることを、注記しておきたい。「ルイ・ランジャール」は自伝的作品であり、結核に罹り叔父の家へ追いやられた、というエピソードも、カミュの実体験なのである。この出来事に対してカミュが心の傷を負ったことは想像されるだろう。『異邦人』においてこのエピソードは、家を追い出されるのが息子から母へと逆転しているのだが、この点に関して東浦弘樹氏は、カミュは母の心情を描くことによって、母が自分を愛していたことを証明しようとした、と述べている⁵。東浦氏の指摘通り、それが『異邦人』の中でこのエピソードを描いたカミュの意図の一つであったのであろう。しかし本研究においては、あくまで

⁵ 東浦弘樹『晴れた日には『異邦人』を読もう—アルベール・カミュと「やさしい無関心」』, 世界思想社, 2010, p.93.

『異邦人』という虚構作品における母子関係を探ることを目的とするため、「ルイ・ランジャー」に描かれているこのエピソードが『異邦人』においても重要な意味を持つものだ、と考えたにとどまっていることを述べておきたい。

なお、本論第3章(3)で「ルイ・ランジャー」を取り上げ、その内容を紹介している。

〈略歴〉

- 1913 年 フランス領アルジェリア コンスタンティーヌ県モンドヴィに生まれる（父方の祖父はアルザス出身、母はスペイン系）
- 1914 年 父がマルヌの戦いで戦死し、アルジェ、ベルクールで（母方の）祖母、叔父、兄、母と貧困の中で暮らす
- 1930 年 肺結核を発症し、静養のため、（母方の）叔父の家に移り住む
- 1934 年 共産党に入党（37年に除名）
- 1936 年 アルジェ大学 卒業
- 1937 年 アルジェのシャルロ社で『裏と表』出版
- 1938 年 「アルジェ・レピュブリカン」紙の記者となる。『結婚』出版
- 1942 年 7月 ガリマール社で『異邦人』出版
1月 結核が再発し、静養のために、フランス南部へ移る
11月 連合軍が北アフリカ上陸し、独軍全仏を占領
- 1944 年 8月 パリで地下出版「コンバ」紙の論説を担当
- 1947 年 『ベスト』出版
- 1954 年 アルジェリア戦争勃発
- 1956 年 『転落』出版
- 1957 年 ノーベル文学賞受賞
- 1959 年 『最初の人間』の執筆を始める
- 1960 年 自動車事故で死亡

第1章 ムルソーとママンの関係

(1) カミュの言葉

カミュは『異邦人』に関して、次のように述べている。

J'ai résumé *l'Étranger*, il y a longtemps, par une phrase dont je reconnais qu'elle est très paradoxale : « Dans notre société tout homme qui ne pleure pas à l'enterrement de sa mère risque d'être condamné à mort. » Je voulais dire seulement que le héros du livre est condamné parce qu'il ne joue pas le jeu. . . . il refuse de mentir. Mentir ce n'est pas seulement dire ce qui n'est pas. C'est aussi, c'est surtout dire plus que ce qui est et, en ce qui concerne le cœur humain, dire plus qu'on ne sent. . . . Il dit ce qu'il est, il refuse de majorer ses sentiments et aussitôt la société se sent menacée. . . .

On ne se tromperait donc pas beaucoup en lisant dans *l'Étranger* l'histoire d'un homme qui, sans aucune attitude héroïque, accepte de mourir pour la vérité.⁶

カミュは『異邦人』を「現代の社会においては、母の埋葬にあたって涙を流さない人間は、誰しも死刑を宣告されることになるかもしれない。」と要約している。その意味は、ムルソーが嘘について上手く立ち回ることをしなかったために、死刑を宣告されたということである。ムルソーは、判事に母の埋葬の日に苦痛を感じたかと問われたら、「自問するという習慣が薄れてしまっているから、ほんとのところを説明するのは難しい」と述べ、裁判でアラブ人殺害の動機を「太陽のせいだ」と述べる。ムルソーは実際にあること以上のことを言うことを拒み、感じている以上のことを言うことを拒む。こうして事実を曲げて発言することを一切しなかったため、社会はムルソーに脅威を感じ、不可解な怪物として人間社会から追放してしまうのである。

ところで、なぜムルソーは母の埋葬で涙を流さなかったのだろうか？ ムルソーは母の死の知らせを受けてから、悲しいといった感情を表したり、絶望した様子を見せたりしていない。母の遺体を見ることを拒否しているし、母の棺の前で煙草を吸い、ミルク・コーヒーを美味しく飲んでいる。母が死んでもこのような行動をとったムルソーは、母を愛していなかったのだろうか？

この点に関して、カミュはこう述べている。

「ムルソーが母親の顔を見たくないという、これはムルソーが死人の顔を見て、決別する

⁶ *ŒUC*, I, pp.215-216. (Appendice de « *L'Étranger* », Préface à l'édition universitaire américaine から引用)

というような、一つの社会の常識ないし主観に従う必要を自分に感じないからで、また自分の感じた以外のことは言いもせず、やりもしないからで、それだからと言ってムルソーがそれほど母を愛していない、とは言えない。彼は彼なりに、彼の思うように、自由にその母を愛している。^{7]}

普通なら、親しい人が亡くなって涙を流さなかったり、遺体を見ることを拒否したら、その人を愛していないのだと思うだろう。しかしムルソーはそうした単純な方程式には当てはまらないのである。とすると、東浦弘樹氏の指摘通り、そもそもなぜムルソーは泣かなかったのかという疑問を持つこと自体が、愛する者が亡くなったら人は泣くものだという前提に立ったものであることに気づかされるだろう⁸。

ムルソーは埋葬の日、母の死に対して確かに無関心な態度をとってはいたが、母を愛していたのである。母が死んで涙を流さなかったからといって、母を愛していないという訳ではないのだ。ムルソーは世間一般に普通だと考えられている行動をとらなただけなのだ。ムルソーは嘘をつかないのだから、埋葬の日、「自分の感じた以外のことは言いもせず、やりもしな」かった。判事がムルソーに、埋葬の日自然の感情を押さえつけていた、と言うように要求した時、ムルソーは「違います。それは嘘だ。」と答えている。ムルソーは勿論、泣きたいという感情を押さえつけていたわけではない。見かけ上だけでなくムルソーの内面においても、“母の死を悼む”という感情はなかったのである。ということは、“母の死を悼む”という感情ではない、別のなにかが、母を愛していたムルソーの中にはあった、ということではないのだろうか？つまり、埋葬の日のムルソーの無関心な態度の裏には、何らかのムルソーとママンの関係があったと言えるのではなからうか。それを知るためには、ムルソーが言葉にせず、行動にも表していないもの、つまりムルソーの内面にとどまったものを明かにしなければならないだろう。

⁷この一節は、1952年の「朝日新聞」に掲載された「カミュ会見記」の一部である。三野博司氏によると、このインタビューのフランス語原文は失われてしまったらしい。これは三野博司『カミュ「異邦人」を読む——その謎と魅力』彩流社、2002、p.186に載せられた記事を引用したものである。

⁸東浦弘樹, *op. cit.*, p.57.

(2) ムルソーとママンの関係—埋葬の日—

埋葬の日の無関心なムルソーの態度の裏には、ママンのどのような関係があったのだろうか？ 物語を辿る上でまず、物語の冒頭においてムルソーとママンの間にどのような関係があったのかを明らかにしたい。

1. 無関心な態度の訳

〈1〉肉体の疲労

埋葬の日の態度について、ムルソー自身が第2部第1章の訊問で説明している。

Cependant, je lui ai expliqué que j'avais une nature telle que mes besoins physiques dérangeaient souvent mes sentiments. Le jour où j'avais enterré maman, j'étais très fatigué et j'avais sommeil. De sorte que je ne me suis pas rendu compte de ce qui se passait.⁹

ムルソーは、自分は肉体的な要求が感情を邪魔する性質であると説明している。

ムルソーは埋葬の日、心の動きがわからなくなるほど、肉体が疲労していた。埋葬の日の前夜、通夜のために椅子に座って一晩を過したため、ほとんど寝なかった。ムルソーはそれによる疲労と腰の痛みを訴えていた。埋葬当日は、直射する太陽でひどい暑さであった上に、村の教会まで約45分も歩いて行かねばならなかったのだ。こうした肉体の疲労のせいで、ムルソーはあまり考えることができなかつたのである。だから、母が土の中に埋められてしまったこともうまく了解できなかつた、とムルソーは説明している。

〈2〉ママンの死を受け容れたくない

ムルソーは母の遺体を見ていない。遺体を目にしていなければ死の実感は薄いはずである。つまり、母が死んだという実感が薄かつたために無関心な態度を取つたのではないか、と考えられるのである。

しかし、なぜ遺体を見なかつたかについてははっきり述べられていない。以下は、ムルソーが母の遺体を見ることを拒否する場面である。

Il a bégayé un peu : « On l'a couverte, mais je dois dévisser la bière pour que vous puissiez la voir. » Il s'approchait de la bière quand je l'ai arrêté. Il m'a dit : « Vous ne voulez pas? » J'ai répondu : « Non. » Il s'est interrompu et j'étais gêné parce que je sentais que je n'aurais pas dû dire cela. Au bout d'un moment, il m'a regardé et il m'a demandé : « Pourquoi? » mais sans reproche, comme s'il s'informait. J'ai dit : « Je ne

⁹ *ŒUC*, I, p.178.

sais pas. »¹⁰

ムルソーは棺の釘を抜こうとする門衛を引き留めている。しかし、なぜ遺体を見ないのかと門衛に聞かれても、「理由はありません。」と述べる。ムルソー自身、なぜ引き留めたか、はっきりとわかっていないのだ。この点は後述するが、おそらく、母の遺体を目の当たりにしてしまうのが怖かったからだ、と考えられる。すなわち、母の死を受け容れたくないという思いがあったのである。

また、埋葬が終わった後も、ムルソーは母の死について考えることを避けているようなのだ。第1部第2章で描かれる、埋葬から2日経った日曜日の夜、彼はこのように述べている。

J'ai pensé que c'était toujours un dimanche de tiré, que maman était maintenant enterrée, que j'allais reprendre mon travail et que, somme toute, il n'y avait rien de changé.¹¹

母が死んだ後も、いつもと変わらない日曜日を過ごし、明日からは会社勤めという日常に戻るのだ。ムルソーは母が死んでも結局何も変わったことはなかった、と言っている。第1部第4章の終わり、犬を失くしたサラマノが隣の部屋で泣いているのを聞くと、ムルソーは「なぜだか知らないが」母のことを思い出し、こう述べる。

Je ne sais pas pourquoi j'ai pensé à maman. Mais il fallait que je me lève tôt le lendemain. Je n'avais pas faim et je me suis couché sans dîner.¹²

母のことを思い出しても、明日は早く起きねばならないと述べ、母のことを考えるのを避けるのである。

このように、ムルソーは母が死んだことを考えまいとしているのだ。ムルソーは母の死を受け容れたくないと思っているから、母の死について考えるのを避けている、と言えるのではなからうか。

なぜムルソーが母の死に対して無関心であったのか、以上の2つの理由を挙げたが、母子関係を考える上では〈2〉の理由に注目したい。すなわち、ムルソーの無関心な態度の裏には、母の死を受け容れたくないという思いがあったのである。

¹⁰ *Ibid.*, p.143.

¹¹ *Ibid.*, p.154.

2. ママンへの理解

母の埋葬の日、ムルソーは無関心な態度を取っていたのだが、一方で、「ママンを理解した」と述べる場面もあるのだ。

埋葬の日の朝、院長からベレ老人を紹介され、ベレと母が夕方、看護婦の付き添いのもと村まで散歩に出ていたことを聞くと、ムルソーはこう述べる。

Je regardais la campagne autour de moi. À travers les lignes de cyprès qui menaient aux collines près du ciel, cette terre rousse et verte, ces maisons rares et bien dessinées, je comprenais maman. Le soir, dans ce pays, devait être comme une trêve mélancolique.¹³

ムルソーは自分の周囲の野原を眺め、「ママンを理解した」と述べている。夕暮れ時に、ママンが「憂愁に満ちた休息」を感じていたであろうことを、ムルソーは理解したのである。ママンと似た感受性をムルソーもまた持っているということだろう。

3. 埋葬の日のムルソーとママンの関係

以上の2点から、埋葬の日の無関心な態度の裏で、ムルソーとママンの間にはどのような関係があったか、推察することができる。すなわち、ムルソーには母の死を受け容れたくないという感情があった。しかしその一方で、母との間にはつながりのようなものがあったと言えるのである。

ムルソーは母の死に対して無関心な態度を取っていたが、それはもちろん母を愛していないからではなく、母の死を受け容れたくないという感情のためであったのだ。しかし、母に対してそのような感情を抱いていただけではなく、ムルソーと母の間にはつながりのようなものがあったのである。

(3) ムルソーの罪悪感

しかしムルソーはなぜ母の死を受け容れられなかったのだろうか？ それは、ムルソーが母に対して罪悪感¹⁴を持っていたからではないだろうか。つまり、生前の母に対して、かつ母が死んだという結果に対して多少とも自分に責任があることを、感じていたのではないか？ 自分のせいで母は不幸になった、自分のせいで母は死んでしまった、と。すなわちムルソーは母を養老院へ入れたことについて罪悪感を持っていたのではないか。養老院へ入れることは、母の世話を放棄すること、母捨てともいえるだろう。

ムルソーが母に罪悪感を持っていたことを証する場面がある。それは母の通夜で、通夜に参加している 10 人ほどの母の友人たちが、自分の真向かいに座っているのを目にした時の場面である。

C'est à ce moment que je me suis aperçu qu'ils étaient tous assis en face de moi à dodeliner de la tête, autour du concierge. J'ai eu un moment l'impression ridicule qu'ils étaient là pour me juger.¹⁵

ムルソーは自分の前に座っている人々が、自分を裁くためにそこにいる、という印象を持っているのだ。実際はそうでないのだから、ムルソーはそれを馬鹿げた印象だと述べているが、そのような印象を抱くということは、何らかの罪悪感があることの証であろう。

またムルソーはこのようにも述べていた。

Tous les êtres sains avaient plus ou moins souhaité la mort de ceux qu'ils aimaient.¹⁶

このようにムルソーが述べるのは、三野氏が指摘しているように、ムルソー自身、母の死を願ったことがあるということだろう¹⁷。

また、実際に母は養老院の件でムルソーを非難していたのである。そのことを、裁判の証人として院長が証言している。

Le président lui a fait préciser si elle me reprochait de l'avoir mise à l'asile et le directeur a dit encore oui.¹⁸

¹⁴ ここでいう罪悪感とは、道徳や義務に反したために引き起こされたものではなく、他者に対する罪悪感であると考えたい。

¹⁵ *ŒUC*, I, p.145.

¹⁶ *Ibid.*, p.178.

¹⁷ 三野博司『カミュ「異邦人」を読む——その謎と魅力』彩流社,2002, p.86.

¹⁸ *ŒUC*, I, p.193.

母はムルソーが自分を養老院へ入れたことに不満を漏らしていたのである。

しかし、ムルソーは罪悪感を意識的に持っているわけではない。なぜならムルソーは自分が母に悪いことをしたということは一切述べておらず、むしろ自己を正当化する言説を述べているからである。罪悪感を持っていることを意識している者は、自分が相手に対して悪いことをしたと自覚しており、悔恨の念に苦しむだろう。ムルソーにそのような様子は見られない。

しかし、ムルソーが自己を正当化する場面にも、多少の違和感は禁じ得ない。例えば、母を養老院へ入れたことについて人から言われ、お金がなかったのだから当然の選択で、それに結局はその方がよかった、と自らを正当化する場面が物語を通して3度も出てくるのである。また、ムルソーは「何か私を咎めているのだ」と思って話し出したりもしている。ムルソーは元来無口な性格であり、「言うべきことがあまりない」といつも思っているがゆえに、養老院の件でことさらに自己を正当化することに違和感を覚えるのである。

つまり、ムルソーの中には、自分の行為が間違っていたことを認めたくないという思いが潜んでいるのではないかと思われるのである。それは、自分は間違っていたのだという、内なる罪悪感と言うべきものと併存するものであるだろう。自分の行為が間違っていたことを認め口に出してしまうとこの内なる罪悪感が顕在化してしまうから、ムルソーは自らを正当化する言葉を発しているように思われるのである。

つまり、ムルソーは母に対して意識的ではない、内なる罪悪感を持っていたのである。母の死を受け容れることは、この内なる罪悪感を認め、それに向き合わねばならないことを意味するだろう。つまり、自分のせいで母は不幸になったのであり、自分のせいで母は死んでしまったと、認めなければならなくなるだろう。この内なる罪悪感ゆえに、ムルソーは母の死の受容を避けたのである。

先行研究でも、母の死を受け容れられなかった原因として、ムルソーの罪悪感を指摘しているものがある。

精神分析批評のピション＝リヴィエールとバランジェは、ムルソーと母は以前サドマゾの関係であったと述べている。彼らによるとサラマノと犬、レエモンとその恋人との関係がそれを暗示しているという。ムルソーは母を殺したという罪悪感を持っており、そのために母の喪を生きることができず、母の死を受け入れることは、ムルソーが母に対して抱いている愛の感情だけでなく、憎しみの感情にも立ち向かわねばなくなり、それはムルソーにとって受け入れがたいものである、と指摘している¹⁹。

また三野博司氏は次のように指摘している。先に述べた通り、ムルソーが«Tous les êtres

¹⁹ Arminda A. de Pichon-Rivière et Willy Baranger (mai-juin 1959) : « Répression du deuil et intensification des mécanismes et des angoisses schizo-paranoïdes (Note sur *l'Étranger* de Camus) », in *Revue française de psychanalyse*, 1959, pp.409-420.

sains avaient plus ou moins souhaité la mort de ceux qu'ils aimaient.²⁰ » と述べているのは、ムルソー自身が一度は母の死を願ったことを示している。母が死んで、母の死を願ったことが罪悪感となり、母の死を承認することはとりもなおさず自らの罪を認めることであるがゆえに、母の死を受容することはできない。しかし、母の死を願うことは母を愛することと反するものではなく、「愛憎交錯するアンビヴァレントな感情が、母の死を受容することを二重に困難にしている」と指摘している²¹。

²⁰ *ŒUC*, I, p.178.

²¹ 三野博司, *op.cit.*, p.86.

(4) ムルソーの自己正当化

ムルソーは母に対して養老院の件で罪悪感を持っているようであったと指摘したが、ムルソーはそれを認めようとせず、自らを正当化している。以下では、その正当化がどのようになされているかを見てみたい。果たしてムルソーが述べている事柄は正しいと言えるのだろうか？ それともムルソーの独断に過ぎないのだろうか？ ムルソーが母を養老院に入れたことは5つの場面で話題になるのだが、それが正しい判断であったと述べているのは、3度はムルソー自身であり、あとの2度はサラマノと弁護士である。サラマノは裁判でムルソー側の証人として証言する際に、この話題を口にしていく。

〈1〉第1部第1章、養老院へ着いてから、ムルソーはまず院長の事務室で院長とママンのことを次のように話す。

« Mme Meursault est entrée ici il y a trois ans. Vous étiez son seul soutien. » J'ai cru qu'il me reprochait quelque chose et j'ai commencé à lui expliquer. Mais il m'a interrompu : « Vous n'avez pas à vous justifier, mon cher enfant. J'ai lu le dossier de votre mère. Vous ne pouviez subvenir à ses besoins. Il lui fallait une garde. Vos salaires sont modestes. Et tout compte fait, elle était plus heureuse ici. » J'ai dit : « Oui, monsieur le directeur. » Il a ajouté : « Vous savez, elle avait des amis, des gens de son âge. Elle pouvait partager avec eux des intérêts qui sont d'un autre temps. Vous êtes jeune et elle devait s'ennuyer avec vous. »

C'était vrai. Quand elle était à la maison, maman passait son temps à me suivre des yeux en silence. Dans les premiers jours où elle était à l'asile, elle pleurait souvent. Mais c'était à cause de l'habitude. Au bout de quelques mois, elle aurait pleuré si on l'avait retirée de l'asile.²²

このようにムルソーにはお金がなく、ママンは若いムルソーと一緒にいたことだろう、その反面養老院には友人もいたし、結局のところ幸せだった。家にいた時は「ママンは黙って私を見守ることに、時を過ごしていた」のだ。ママンが養老院に来た当初に泣いていたのは家での暮らしに慣れていなかったからで、数か月経つと養老院に慣れ、逆に養老院から引き離そうとしたらきっと泣いただろう、とムルソーは述べる。

〈2〉第1部第5章、犬を失くしたサラマノがムルソーの部屋にやってくる。そしてムルソーはサラマノの犬の話や亡くなった妻の話を聞く。それからサラマノはママンについて次のように話し出す。

²² *ŒUC*, I, p.142.

Il a émis la supposition que je devais être bien malheureux depuis que maman était morte et je n'ai rien répondu. Il m'a dit alors, très vite et avec un air gêné, qu'il savait que dans le quartier on m'avait mal jugé parce que j'avais mis ma mère à l'asile, mais il me connaissait et il savait que j'aimais beaucoup maman. J'ai répondu, je ne sais pas encore pourquoi, que j'ignorais jusqu'ici qu'on me jugeât mal à cet égard, mais que l'asile m'avait paru une chose naturelle puisque je n'avais pas assez d'argent pour faire garder maman. « D'ailleurs, ai-je ajouté, il y avait longtemps qu'elle n'avait rien à me dire et qu'elle s'ennuyait toute seule. — Oui, m'a-t-il dit, et à l'asile, du moins, on se fait des camarades. » Puis il s'est excusé.²³

ムルソーは母を養老院へ入れたことで自分の評判が限界で悪いことは知らなかった、という。ムルソーには母を看護するだけのお金がなかったのだから、養老院へ入れたのは仕方のないことで当たり前なやり方だと弁明するのである。それにママンはもうムルソーに話すことはなくなって、家では1人で退屈していたとも述べている。

〈3〉第2部第3章、裁判1日目、裁判長が「この事件に一見無関係なように見えるが、実は大いに密接な関係にあると思われる問題」として、ママンのことをムルソーに次のように問い直す。

Il m'a dit qu'il devait aborder maintenant des questions apparemment étrangères à mon affaire, mais qui peut-être la touchaient de fort près. J'ai compris qu'il allait encore parler de maman et j'ai senti en même temps combien cela m'ennuyait. Il m'a demandé pourquoi j'avais mis maman à l'asile. J'ai répondu que c'était parce que je manquais d'argent pour la faire garder et soigner. Il m'a demandé si cela m'avait coûté personnellement et j'ai répondu que ni maman ni moi n'attendions plus rien l'un de l'autre, ni d'ailleurs de personne, et que nous nous étions habitués tous les deux à nos vies nouvelles.²⁴

このようにムルソーは陳述で、ママンに看護婦をつけたり手当したりする金がなく、その金を他の人に用立てしてもらおうなどということは考えず、ママンとムルソーはお互いに何一つあてにしていなかったし、他人からも何一つあてにしていなかったと述べている。それに2人もそれぞれ新しい生活に慣れていったとも。

²³ *Ibid.*, pp.167-168.

²⁴ *Ibid.*, p.192.

〈4〉第2部第3章、証人訊問で、サラマノがムルソー側の証人として立ち次のように発言する。

・ ・ ・ il a rappelé que j'avais été bon pour son chien et ・ ・ ・ il a répondu à une question sur ma mère et sur moi en disant que je n'avais plus rien à dire à maman et que je l'avais mise pour cette raison à l'asile.²⁵

このようにサラマノはムルソーがママンともう話すことがなかったのもので、そのために養老院へ入れたと述べている。Q)ではムルソーは「*il y avait longtemps qu'elle n'avait rien à me dire*」と述べていたが、ここではムルソーの方でもママンに話すことがなかった、という証言になっている。つまり、ムルソーと母はお互いに話すことがなかった、ということが分かる。

〈5〉第2部第4章、検事の弁論の後、弁護士の弁論が行われる。そこで弁護士は養老院の件に言及する。

Pour lui, j'étais un fils modèle qui avait soutenu sa mère aussi longtemps qu'il l'avait pu. Finalement j'avais espéré qu'une maison de retraite donnerait à la vieille femme le confort que mes moyens ne me permettaient pas de lui procurer. « Je m'étonne ・ ・ ・ qu'on ait mené si grand bruit autour de cet asile. Car enfin, s'il fallait donner une preuve de l'utilité et de la grandeur de ces institutions, il faudrait bien dire que c'est l'État lui-même qui les subventionne. »²⁶

弁護士は、ムルソーを「力の及ぶ限り長く母親を扶養した、模範的な息子」であり、母に「自分の資力では授けられないような安楽な暮らし」が養老院でできると期待した。養老院は国家が補助金を出している程、必要で偉大な場所であるのだ。

ムルソーが述べていることをまとめると次のとおりである。

お金がなかったのだから、母を養老院へ入れるという選択は当然であった。ムルソーとママンはお互いに何一つあてにしていなかったし、他人からも何一つあてにしていなかった。また、お互いにもう話すことがなかったし、ママンは養老院には友人がいたのだから、養老院に入った方が幸せだった。養老院に来た当初に泣いたのは、家での暮らしに慣れていなかったからであって、最近では、ママンは養老院の暮らしにすっかり慣れていたので、2人ともそれぞれ新しい生活に慣れていったのである。

²⁵ *Ibid.*, p.196.

²⁶ *Ibid.*, p.202.

ムルソーの考えは、自分は母を不幸にした訳ではないと、また母を捨てたわけでもないということであろう。金銭面で、養老院に入れたのは仕方がなかったとしても、お互い何一つ当てに
してなかった、養老院に来て泣いたのは習慣のせいだ、などという理屈は、もしそれが本当で
ないのなら、非情さを感じさせるだろう。

第2章 ムルソーの罪悪感

本章では、ムルソーの罪悪感について、検討したいと思う。

本章における(1)(2)では、裁判とムルソーの母に対する罪悪感について考察したい。なぜなら、ムルソーはアラブ人殺害の罪で裁判にかけられるのであるが、そこで問題となるのはアラブ人殺害行為よりもむしろムルソーの母に対する無関心な態度であるからだ。ムルソーは公判1日目の証人訊問で、埋葬の日についての証言を聞き、母に対して無関心であった自分を「罪人である」と述べている。罪人であると認めることは、その言葉通り、ムルソーが自らの母に対する罪を認めたということの意味するのだろうか？ また、この裁判における死刑判決は、ムルソーの母に対する罪悪感が裁かれ、死刑になったということの意味するのだろうか？

(1) 裁判—罪人であると知ること—

1. 罪人であると理解すること

ムルソーの事件においては、母の埋葬の日に無関心だったことが、「一見無関係なように見えるが、実は恐らく大いに密接な関係にあると思われる問題」とされるのである。予審とそれに続く公判ではムルソーの母に対する態度が問題視されるのである。

公判1日目に、検察側の証人として、院長、門衛、ベレが、被告側の証人としてレエモン、マソン、サラmano、マリイが呼び出され、それぞれ証言を行う。証人たちによって、こうして第1部でのムルソーの行動が他者の客観的な視点で語られ直されることになるのである。最初に証言をしたのは院長である。以下は、院長が証言を行う場面である。

On lui a demandé si maman se plaignait de moi et il a dit que oui mais que c'était un peu la manie de ses pensionnaires de se plaindre de leurs proches. Le président lui a fait préciser si elle me reprochait de l'avoir mise à l'asile et le directeur a dit encore oui. Mais cette fois, il n'a rien ajouté. À une autre question, il a répondu qu'il avait été surpris de mon calme le jour de l'enterrement. On lui a demandé ce qu'il entendait par calme. Le directeur a regardé alors le bout de ses souliers et il a dit que je n'avais pas voulu voir maman, je n'avais pas pleuré une seule fois et j'étais parti aussitôt après l'enterrement sans me recueillir sur sa tombe. Une chose encore l'avait surpris : un employé des pompes funèbres lui avait dit que je ne savais pas l'âge de maman. Il y a eu un moment de silence . . . Puis le président a demandé à l'avocat général s'il n'avait pas de question à poser au témoin et le procureur s'est écrié : « Oh ! non, cela suffit », avec un tel éclat et un tel regard triomphant dans ma direction que, pour la première fois depuis bien des années, j'ai eu une envie stupide de pleurer parce que j'ai senti

combien j'étais détesté par tous ces gens-là.²⁷

院長のムルソーについての証言は、以下のようにまとめられる。

- ・ ママンはムルソーのことについて不平を言っていた
- ・ ママンは養老院に入れたということでムルソーを非難していた
- ・ ムルソーは埋葬の日に冷静だった—ママンの顔を見ようとしなかった、一度も涙を見せなかった、埋葬後は黙祷もせずすぐにさま立ち去った
- ・ ママンの年齢を知らなかった

そこにいた人々はこれを聞いて、ムルソーは母を捨てた、母の死にさえも無関心であった、母を愛していない非情な人間である、と思ったことだろう。ムルソーはこの時、「これらのひとたちにどれほど自分が憎まれているか」を感じ、泣きたいという気持ちになっている。続く門衛の供述は、以下のとおりである。

Il a dit que je n'avais pas voulu voir maman, que j'avais fumé, que j'avais dormi et que j'avais pris du café au lait. J'ai senti alors quelque chose qui soulevait toute la salle et, pour la première fois, j'ai compris que j'étais coupable.²⁸

門衛は、このようにムルソーがママンに会いたがらず、煙草を吸い、よく眠り、ミルク・コーヒーを飲んだ、と証言する。その時ムルソーは傍聴席に湧きあがる自分に対する嫌悪や憎しみといったものを感じ取り、「このときはじめて自分が罪人だということを理解」するのである。

証人達が述べたことは第1部でのムルソーを他者の視点で客観的に述べたものであり、第1部のムルソーの行動は、客観的に見ると人々の憎悪を引き起こすものと見られたのである。第1部では、ムルソーは母の死を考えることも話すことも避けていたため、埋葬の日については一度も言及されていなかった。第2部第1章に描かれる訊問では、予審判事と弁護士は、ムルソーが埋葬の日に「感動を示さなかった」ことに触れて、その日は自然の感情を押しえつけていたのだと言うようにムルソーに要求するのだが、それに対しムルソーは「こんな一身上の話は私の事件とは何の関係もない」と彼らに向かって反論している。しかし公判1日目で、埋葬の日に無関心な態度を取っていたことが人々から憎まれるべき行為であった、ということをはっきりと自覚させられるのである。

ムルソーは物語の冒頭から、養老院の件で母に対して、意識的ではないが罪悪感を抱いていた。公判1日目にして、母を養老院へ入れたことはもちろん、埋葬の日に無関心であった

²⁷ *Ibid.*, pp.192-193.

²⁸ *Ibid.* p.193.

ことも、人々から憎まれる行為であることを理解させられた。そして自らを「罪人である «j'étais coupable» 」と認めるに至る。

しかし、ムルソーが「私は罪人である」と口にしたということは、果たしてムルソーが母に対する罪悪感をはじめ意識的に持つことになった、ということの意味するのだろうか？ すなわち、母に対する罪を認めたことを意味するのだろうか？ しかし実際この場面以降も、ムルソーは依然として母に対する罪を認めるようなことはいっさい口に出していない。

それでは、「罪人である」とムルソーが述べるその言葉と罪悪感は結び付いていないということなのだろうか？ 次にそれを考察したい。

2. ムルソーにおける罪の意識と罪人

ムルソーが母との一件で述べた「罪人である」という言葉は何を意味するのか？

それを明らかにするためにまず、ムルソーが“罪”についてどう捉えているか、考えたい。罪には法的な罪、道徳的な罪、宗教的な罪があるが、もともとは宗教的な意味から来ている観念である。キリスト教では、原罪を負う人間は本質的に罪深い存在であり、罪を犯さざるをえない存在だと教えている。しかし神を信じない者にとっては、人間は原罪を負った罪深い存在であるとはいえない。

『シーシュポスの神話』では、神を信じていない人間が罪をどのように捉えているかについて、次のように述べられている。

On lui demande de sauter. Tout ce qu'il peut répondre, c'est qu'il ne comprend pas bien, que cela n'est pas évident. Il ne veut faire justement que ce qu'il comprend bien. On lui assure que c'est péché d'orgueil, mais il n'entend pas la notion de péché ; que peut-être l'enfer est au bout, mais il n'a pas assez d'imagination pour se représenter cet étrange avenir ; qu'il perd la vie immortelle, mais cela lui paraît futile. On voudrait lui faire reconnaître sa culpabilité. Lui se sent innocent. À vrai dire, il ne sent que cela, son innocence irréparable.²⁹

キリスト教徒は、人間の運命は完全に神の手に握られていると考える。だから神なしで生きていこうとする彼に対し、それは傲慢の罪だと言って非難するのである。しかし彼は、罪という観念がわからないのである。なぜなら、そもそも地獄という観念を持たないからであり、彼にとって救済もあり得ないのだ。つまり永生を得るために償わねばならない罪などあり得ないのだ。彼は自らに対して「一点の非の打ちどころのない無罪性」しか感じていないのである。

神を信じていないムルソーもまた、この彼と同じように考えていると思われる。つまり、

²⁹ *Ibid.*, p.255.

ムルソーにとって罪という言葉は自分自身に対して悔悛をせまる言葉としてとらえられていないのである。なぜなら、自分が無罪であると感じているからだ。

ムルソーは「罪人である」ことについて、第2部第5章の御用司祭との会話で次のように述べている。

Je lui ai dit que je ne savais pas ce qu'était un péché. On m'avait seulement appris que j'étais un coupable. J'étais coupable, je payais, on ne pouvait rien me demander de plus.³⁰

ムルソーは、宗教上の罪 « un péché » というものが理解できない。「罪人である」と自分が言うのは、ただ人からそう教えられたからそう言っているに過ぎないのである³¹。ムルソーが自分を「罪人だ」と言う時、規範に反した自分は責任を負わねばならない、と考えている。しかし、それは罪を認めること、すなわち罪悪感や悔恨といった感情には結び付かないのである。

以上から、公判1日目に「初めて罪人であると理解した」とムルソーが言う時においても、「罪人である」というこの言葉には、罪悪感＝罪の自覚が直接に結び付いていない、と考えられる。ムルソーは裁判という裁きの場において、自分が裁かれる対象である「罪人」だと周囲から教えられて、「自分は罪人である」と言ったに過ぎないのである。つまり、この時ムルソーが「私は罪人である」と口にしたということは、ムルソーが母に対する罪悪感を意識するようになった、ということの意味してはいないのである。「罪人である」とムルソーが述べたという事実だけが、ムルソーの罪悪感が意識化したことを断定できる唯一の判断材料であったが、この言葉さえもムルソーの罪悪感＝罪の自覚を意味するのではなかったのである。

しかし、ここではあくまで、「罪人である」というこの言葉が、ムルソーが罪の自覚を得たということの意味するわけではない、ということのみを明らかにしただけである。つまり、ムルソーの内面においては、母に対して、埋葬の日に無関心な態度を取ったことへの罪悪感を持ったかもしれないのである。

そもそも人間は、他人から、あなたは悪いことをした、と言われた（見られた）時に、罪悪感を持つものではないだろうか？ この時ムルソーは、人々から憎まれていることを感じている。つまり人々から“母に対して悪いことをした人間だ”と規定されたということだろう。だから、やはりこの時ムルソーは母に対して罪悪感を持ったと言えるのかもしれない。しかしそれも、内なる罪悪感であるだろう。なぜなら先ほど述べたように、「罪人である」と述

³⁰ *Ibid.*, p.210.

³¹ 本稿では深く追及しないが、ムルソーにはアラブ人を殺害したという自覚がないことを指摘しておきたい。ムルソーは自分を無に帰そうとする、死へと誘い込もうとする太陽に向かって引金を引いたのである。だから、アラブ人を殺害したという意識がほぼないのだ。

べた以後も、自分の罪を認める言葉は述べていないし、それを察することができるような言説は見当たらないからである。この点は後述するつもりである。

(2) 裁判—ムルソーの死刑判決—

公判 2 日目に、検事と弁護士による弁論が行われた後、判決が言い渡される。結果は検事側が勝訴し、ムルソーは死刑判決を言いわたされるのである。先にこの裁判ではムルソーの母に対する態度が問題視されると述べたが、検事は « un homme qui tuait moralement sa mère se retranchait de la société des hommes³² » と述べ、ムルソーを死刑へと追いやるのである。これはつまり、ムルソーは母に対する罪悪感が裁かれ、死刑になったということを意味するのであろうか？ 結論から言うと、そうではない。この検事の言葉には正当性がないのである。以下ムルソーを死刑判決へと導いた検事の弁論を追うことで、この点を検証したい。

1. 検事の弁論の性格

検事は弁論で、レエモンの事件について次のように語っている。

Ce qu'il disait était plausible. J'avais écrit la lettre d'accord avec Raymond pour attirer sa maîtresse et la livrer aux mauvais traitements d'un homme « de moralité douteuse ». J'avais provoqué sur la plage les adversaires de Raymond. Celui-ci avait été blessé. Je lui avais demandé son revolver. J'étais revenu seul pour m'en servir. J'avais abattu l'Arabe comme je le projetais. J'avais attendu. Et « pour être sûr que la besogne était bien faite », j'avais tiré encore quatre balles, posément, à coup sûr, d'une façon réfléchie en quelque sorte.³³

検事の弁によると、ムルソーはレエモンの恋人への復讐に手を貸そうとして手紙を書き、浜辺ではアラブ人の兄に挑みかかり、さらにレエモンから預かったピストルを使用する目的で一人で出かけ、彼を撃ち殺した。そして完全に息の根を止めるために、4 発撃ったということになる。

しかし実際は、すべてが偶然に起こった出来事に過ぎない。ムルソーは犯罪を計画などしていないのだ。例えば、彼 1 人で浜辺へ向かう場面を検証してみたい。レエモンからピストルを預かった後、一旦別荘へ戻るのだが、その後結局 1 人で浜へ出かけて行く。その時のムルソーの様子が以下のごとく描写されている。

Je l'ai accompagné jusqu'au cabanon et, pendant qu'il gravissait l'escalier de bois, je suis resté devant la première marche, la tête retentissante de soleil, découragé devant l'effort qu'il fallait faire pour monter l'étage de bois et aborder encore les femmes. Mais

³² *ŒUC*, I, p.200.

³³ *Ibid.*, p.199.

la chaleur était telle qu'il m'était pénible aussi de rester immobile sous la pluie aveuglante qui tombait du ciel. Rester ici ou partir, cela revenait au même. Au bout d'un moment, je suis retourné vers la plage et je me suis mis à marcher.³⁴

ムルソーは直射する太陽の光で頭ががんがんにしており、階段を上って、さきほど起こった喧嘩のことで泣いている女たちの傍に戻るのを嫌がる。しかしそこにたたずんでも、耐えられない程の暑さであり、ムルソーはそこにいても、出かけて行っても、結局どちらでも変わらないと考え、浜へと向うのである。このように、ムルソーの行動を決定しているのはその瞬間ごとであるのだ。よって、ムルソーが犯罪を予め計画していたとするのは誤りである。

ロジェ・キーヨが「ムルソーが偶然のものとして体験したこの殺人事件に、検事は結末と暴露された事実を見ていた³⁵」と指摘しているように、この点に関しては多くの指摘がされているが、検事は、第1部で展開する偶然に起こった数々の出来事に、必然的なつながりを持たせた物語を捏造しているのである。要するに、検事はムルソーを死刑判決へと導くために、虚構の物語を作り出してしまっているのである。

このように、検事の弁論はつじつま合わせの虚構にすぎないのである。つまり検事の弁論は、こうした虚偽性を帯びた性格のものなのだ。

2. 検事によるムルソー像

続いて検事は、ムルソー自身について語りだす。母の葬式で涙を見せずに、また、アラブ人殺害に対して悔恨を感じているかと問われれば「むしろ倦怠を感じている」と答えるような、一般人が了解しているモラルやルールからは外れたムルソーの存在について、検事は問題視するのである。検事にうつるムルソー像は以下のごとくである。

・魂というものは一かけらもない、人間らしいものは何一つない（« je n'en avais point, d'âme, et que rien d'humain³⁶ »）

・不感無覚（« mon insensibilité »）

・畸形的なもの以外何一つ読み取れない一人の男（« un visage d'homme où je ne lis rien que de monstrueux³⁷ »）

検事によると、ムルソーは理解不能な怪物のような存在なのである。検事はこうしたムルソーに、恐怖さえ感じている。心に「空洞 « le vide »」を持つムルソーは社会をも飲み込みかねないから、死刑に処さねばならないのだ。

³⁴ *Ibid.*, p.174.

³⁵ ロジェ・キーヨ, 『アルベール・カミュ』, 室淳介訳, 白水社, 1957, p.84.

³⁶ *ŒUC*, I, p.200.

³⁷ *Ibid.*, p.201.

しかし実際、ムルソーは「感受性がない《insensibilité》」人間などではなく、鋭敏な感受性の持ち主である。夕べに和やかさを感じ、太陽の光に喜びを感じる。また、他人が自分に対して感じていること、不満な様子や嫌悪、憎しみ、また満足といった感情に敏感である。例えば次のような描写がある。

En me réveillant, j'ai compris pourquoi mon patron avait l'air mécontent quand je lui ai demandé mes deux jours de congé : c'est aujourd'hui samedi. . . . Mais d'une part, ce n'est pas de ma faute si on a enterré maman hier au lieu d'aujourd'hui et d'autre part, j'aurais eu mon samedi et mon dimanche de toutes façons. Bien entendu, cela ne m'empêche pas de comprendre tout de même mon patron.³⁸

主人はムルソーが母の葬式で3日間仕事を休んだのが気に入らなかった。ムルソーはそのことを感じ取り、さらには、主人の気持を理解しようとさえしている。このように、ムルソーは他人の気持を感じ取り、理解しようと努める人間なのだ。相手が自分に対して不可解な様子であったら理解してもらいたいと思ったり、なるべく相手が満足するような行動をしたりしている。よって、ムルソーは決して感受性のない人間ではない。勿論、魂がない訳でも、人間らしいものが欠如している訳でもない。

つまり検事は、アラブ人殺害事件の動機と同じくムルソー自身についても、虚構の人物を作り出しているのである。先に見たように、検事は《un homme qui tuait moralement sa mère se retranchait de la société des hommes³⁹》と述べるのであるが、この《un homme qui tuait moralement sa mère》とは、検事が彼を裁くため捏造した不感無覚で魂を持たない、非人間的な怪物としての彼の虚像に他ならない。ゆえに、この台詞（定義）は偽りに満ちた言葉なのであり、ムルソー実像とは異なっているのである。

「精神的に母を殺した男」、この言葉はある意味では、ムルソーに当てはまるかもしれない。なぜならムルソーは母を養老院へ入れた＝母を捨てたのだから、また、おそらく母の死を願ったこともあるのだから。これらの事柄に対して、ムルソーは内なる罪悪感を持っていたのだった。つまり「精神的に母を殺した男」という言葉は、ムルソーの母への罪悪感を顕在化させ、有罪とした言葉でもあるのだ。

しかし、検事はこうしたムルソーの内面における罪悪感を顕在化させ、それを有罪としたわけではない。検事は「不感無覚」で怪物的な人物像 A を作り出し、彼を死刑へと追いやったのである。つまり、「精神的に母親を殺した男」という言葉だけを取り出すと、確かにそれはムルソーに当てはまるかもしれない。しかし、それを文脈に置き直すと、ムルソーには当てはまらないのである。冒頭でこの言葉には正当性がないと述べたが、それはこういう訳なのである。

³⁸ *Ibid.*, p.151.

³⁹ *Ibid.*, p.200.

3. まとめ

証人たちの証言はすべて事実であった。しかし、それを元に検事が繰り広げる弁論は、恣意的な解釈にゆがめられた、真実とは異なるものであるのだ。検事はムルソーが犯罪を予謀し、不感無覚で凶悪な魂の持ち主だと断ずるのである。それらは偽りの虚構であるからには、ムルソーは母への罪悪感が裁かれ死刑判決を受けたとは言えないのである。

実際、ムルソー自身も、この裁判が真実から遠く隔たったものであることを感じている。裁判の間、ムルソーは次のように述べている。

En quelque sorte, on avait l'air de traiter cette affaire en dehors de moi. Tout se déroulait sans mon intervention. Mon sort se réglait sans qu'on prenne mon avis.⁴⁰

Moi, j'ai pensé que c'était m'écarter encore de l'affaire, me réduire à zéro et, en un certain sens, se substituer à moi. Mais, je crois que j'étais déjà très loin de cette salle d'audience.⁴¹

ムルソーが発言しようとする時、弁護士は、「黙っていなさい。この事件にはその方がいいのです。」と言う。こうして公判2日目はムルソーが参加することなく裁判が進められるのである。だからムルソーは、この裁判は事件から自分を切り離していること、自分の運命が勝手に決められていくことを感じ、自分がこの法廷から遠く離れている部外者だと感じているのだ。

ムルソー自身もそう感じているように、この裁判は嘘に満ちているので、ムルソーは母に対する罪悪感こそが裁かれ、死刑判決を受けたわけではなかったのである。

なお、母との関係で死刑宣告の意味を問題にした先行研究には以下のようなものがある。精神分析批評ピション＝リヴィエールとバランジエは、ムルソーはサドマゾの関係にあった母の死の責任を感じ、喪の仕事に失敗した。だからムルソーは失われた対象＝母と運命を共にすることを選び、死に至る。つまりムルソーは後追い自殺をしたのだ、と指摘している

42。

アラン・コストは、レエモンを助けたことでムルソーを死刑に追いやるという論理の不自然さを指摘し、その理由をこう説明している。ムルソーとレエモンは同一人物であり、レエモンの暴力には幼いカミュが体験した、暴漢による母への暴力が投影されている。ムルソーにはレエモンの恋人に対する暴力からその兄の殺害まですべてに罪があり、死刑になる、と

⁴⁰ *Ibid.*, p.198.

⁴¹ *Ibid.*, p.201.

⁴² Arminda A. de Pichon-Rivière et Willy Baranger, *op. cit.*, pp.409-420.

指摘している⁴³。

⁴³ Alain Costes, *Albert Camus ou la parole manquante, étude psychanalytique*, Payou, 1973, pp.67-74.

(3) ママンの考え

裁判では、ムルソーの母への罪悪感が裁かれたわけではなかった。では、ムルソーの母への罪悪感はどうなったのだろうか？最終的にどうなるかは、物語の結末まで待たねばならないが、第2部からムルソーと母の関係に変化が見られるのである。というのも、ムルソーは刑務所に入ってから、母のことを何度も思い出すようになるからだ。

ムルソーが養老院の件で述べていた事柄のひとつに「習慣 « l'habitude » 」というものがあったが、この習慣という考えは実は母のものであり、ムルソーは刑務所生活において、この考えに何度か言及するのである。以下では、この考えがどのように扱われているかを追い、ムルソーとママンの関係にどのような変化が見られるかを検証したい。

1. ムルソーの自己正当化

ムルソーは養老院の件で、こう述べていた。

Dans les premiers jours où elle était à l'asile, elle pleurait souvent. Mais c'était à cause de l'habitude. Au bout de quelques mois, elle aurait pleuré si on l'avait retirée de l'asile. Toujours à cause de l'habitude. ⁴⁴

・ ・ ・ nous nous étions habitués tous les deux à nos vies nouvelles. ⁴⁵

母が養老院に来た最初の頃に泣いたのは、家での暮らしに慣れていたのであった。少し経つと母は養老院の暮らしにすっかり慣れたのであって、2人ともそれぞれ新しい生活に慣れていった、とムルソーは述べている。

しかし、ママンの側はどうだったのだろうか？家を出て養老院へ行った最初の頃に泣いたとは、養老院に来て不幸を感じていたからかもしれないし、もしかしたら息子に捨てられたという思いがあったのかもしれない。しかしそれに対しムルソーは、「習慣」のせいだと言い張るのである。つまり、ママンが養老院で泣いていたのは、ただ単に家での暮らしに慣れていただけなのであって、結局は養老院での暮らしに慣れたので、そこでの暮らしは悪くはなかった。それどころか、ママンは今度は養老院での暮らしに執着していたのである。勿論自分はママンを捨てたわけではないし、ママンの側も、息子に捨てられたという思いは持っていなかったと、ムルソーは言いたいのだろう。

⁴⁴ *ÆUC*, I, p.142.

⁴⁵ *Ibid.*, p.192.

2. 習慣というものを実感する

第2部第2章には、刑務所での生活が描かれる。ムルソーは刑務所に入り、今まで可能であったことがいきなり著しく制限される生活を余儀なくされるのだ。

Au début ma détention, pourtant, ce qui a été le plus dur, c'est que j'avais des pensées d'homme libre. Par exemple, l'envie me prenait d'être sur une plage et de descendre vers la mer. À imaginer le bruit des premières vagues sous la plante de mes pieds, l'entrée du corps dans l'eau et la délivrance que j'y trouvais, je sentais tout d'un coup combien les murs de ma prison étaient rapprochés. Mais cela dura quelques mois. Ensuite, je n'avais que des pensées de prisonnier.⁴⁶

刑務所に入れられた最初の頃は「自由人の発想」でものごとを思考していたために不自由な生活を強いられたがための、辛い精神状態が数か月続いたことが語られる。海へ降りて行きたいという欲望や煙草をすいたい欲望、あるいは性欲といった様々な欲望が満たされない不自由な生活はおそらく耐え難い生活であったことだろう。それはムルソーが語りたくなかったと述べるように、つらい経験であったことがうかがえる。しかし次第に、そうした自由を束縛された囚人生活に慣れてしまうのである。様々な欲望を断念せざるを得ない生活に慣れ、しまいには「囚人の考え方」しかできなくなり、「j'étais chez moi dans ma cellule et que ma vie s'y arrêterait⁴⁷」と感じるようになるのである。

その頃、ムルソーはまた次のように述べている。

J'ai souvent pensé alors que si l'on m'avait fait vivre dans un tronc d'arbre sec, sans autre l'occupation que de regarder la fleur du ciel au-dessus de ma tête, je m'y serais peu à peu habitué. . . . C'était d'ailleurs une idée de maman et elle le répétait souvent, qu'on finissait par s'habituer à tout.⁴⁸

普通ならもし生きたまま枯れ木の幹の中に閉じ込められたら、何もすることがなく退屈で仕方がないだろう。ほとんど変化のない花や空を見て日々を過ごしてゆくなどということとは、想像するだけでつらい生活であろう。しかし、そのような状態に置かれたとしても人間は結局その生活にも慣れてしまい、花の微妙な変化や鳥影や空の雲が流れるのを眺めることで時を過ごすことができるようになるというのである。人間にとってどのような状況においても慣れてしまわないものなどない、とムルソーは実感したのだ。

そして実は、「習慣」についての考えは母のものだったのである。それをムルソーが学び取り、自分の考えとしたのだ。そしてその考えが正しいことを、ここで実感しているのであ

⁴⁶ *Ibid.*, p.185.

⁴⁷ *Ibid.*, p.182.

⁴⁸ *Ibid.*, p.185.

る。

またマルソーは次のようにも述べている。

Or, à bien réfléchir, je n'étais pas dans un arbre sec. Il y avait plus malheureux que moi. . . .

Du reste, je n'allais pas si loin d'ordinaire. Les premiers mois ont été durs. Mais justement l'effort que j'ai dû faire aidait à les passer. . . . À part ces ennuis, je n'étais pas trop malheureux.⁴⁹

マルソーは、ここで自分は枯れ木の中に閉じ込められたわけではなく、この世には自分より不幸なものもいるのだと思い描く。自分より不幸な者がいることを思えば、自分の置かれている状況はそれほど不幸だとは感じられなくなるだろう。また、自由を奪われた独房生活がつらかったのも最初の数か月であり、その後はそのような生活にも慣れてしまったので、もはやつらいものでなくなったのだ。だからマルソーは、独房生活を「そうひどく不幸ではなかった」と正直に述べるに至るのである。

実は、この「人間は全くの不幸になることはない」という考えもまた、母の考えであるのだ。第2部第5章において、死刑判決を受けた後の独房で、マルソーは毎夜、死刑執行人が来る夜明けを、耳を澄まして待ち続ける。その際、次のように述べている。

Passé minuit, j'attendais et je guettais. . . . Je peux dire, d'ailleurs, que d'une certaine façon j'ai eu de la chance pendant toute cette période, puisque je n'ai jamais entendu de pas. Maman disait souvent qu'on n'est jamais tout à fait malheureux. Je l'approuvais dans ma prison, quand le ciel se colorait et qu'un nouveau jour glissait dans ma cellule. Parce qu'aussi bien, j'aurais pu entendre des pas et mon cœur aurait pu éclater.⁵⁰

このように死刑執行人が来るのを耳を澄ませて待つ間、決して足音が聞こえることはなかった、足音が聞こえたら心臓は破裂しただろう、とマルソーは語る。まだこの時は、マルソーは死の恐怖におびえていたのだから、不幸の底に陥れられることはなかったのだ。ここでもまた、「人間は全く不幸になることはない」という母の考えが正しい事を、実感したのである。

⁴⁹ *Ibid.*, pp.185-186.

⁵⁰ *Ibid.*, p.207.

3. ムルソーの正当化の正しさ

これまで見てきたように母の考えは、「人間はどんなことにも慣れてしまう」、「人間は全くの不幸になることはない」というものであった。ムルソーはこれらの考えを母から学び取り、自らの考えとしていたのであろう。そして独房生活を通して、これらの考えが正しいことを実感したのである。独房での生活は確かに辛いものであったが、それでもムルソーは「ひどく不幸ではなかった」。それに、そうした辛さにも次第に慣れてしまったので、結局ムルソーは全くの不幸と呼べるものにはならなかったのである。

母もまた刑務所生活に慣れていったムルソーと同じく、養老院での生活に慣れたのであり、そこでの生活は不幸ではなかったということだろう。幸福ではなかったかもしれないが、不幸でもなかったのである。また、母が養老院での暮らしに執着していたということもまた本当だったのだろう。そもそも「人間はどんなことにも慣れてしまう」、「人間は全くの不幸になるということはない」という考えは元々母のものだったのだから、養老院でも母はこうした考えを持ちながら生活していたことが予想される。要するに、ムルソーが述べていた「習慣」という正当化は正しかったのであり、ムルソーは母を不幸にした訳ではなかったのだ。これは推測の域を出ないが、おそらく、母の考えが正しかったことを実感したムルソー自身も、自分の正当化が正しかったことを感じているのではないだろうか。

しかし、ムルソーはまた、「母が養老院に来た最初の頃に泣いたのは、家での暮らしに慣れていたのであった」とも述べていた。つまり、ムルソーが言うには、母は家での暮らしに幸せを見出していたのではなく、ただ単にそれに慣れていたのである。実際、ムルソーと母の生活は幸せと呼べるものではなかったのだろうか？この点については、後述するつもりである。

しかし、ここでムルソーが実感することとなる、“母の考えの真実性”は、ムルソーと母のつよいつながりを感じさせはしないだろうか？つまり、偽りに満ちた裁判の一方に、母の考えの真実性が存在しているように思われるのである。ここに、偽りと真実というコントラストを見ることができるだろう。ゆえに、真実性を宿しているムルソーと母の間には、つよいつながりがあることを予感させるのである。ムルソー自身、こうした母とのつながりを感じていたとしたら、“ママンは息子に捨てられたのだという思いは持っていなかったのだ”という自らの主張に対して、ムルソー自身がここに至ってその確信を深めたのではないだろうか。

死刑判決を受けたムルソーは物語の最終章で、ムルソーを死刑へと追いやった社会から遠く離れ、死へと向かう。そしてそこで、ママンとの確信的なつながりを得るのである。続く第3章では、ムルソーとママンのつながりがどのようなものなのかについて考察したい。

第3章 ムルソーとママンのつながり

本章では、ムルソーとママンのつながりについて考えたい。

作品の最終章の第2部第5章で、ムルソーは母への確信的つながりを得るに至る。以下本章(1)(2)では、作品第2部第5章を取り上げ考察し、そして、第1部第1章でムルソーが「ママンを理解した」と述べた場面にかがえた、ムルソーとママンのつながりについて、それがどのようなものなのか明らかにしたい。

(1) ママンへの理解

1. 死の受容

死刑判決を受けた後、ムルソーは独房を移される。そこでムルソーは死について考え始める。死刑を前にして、死を現実的なものとして考えざるを得なくなるのである。新聞は死刑執行を報じ、「社会に償わねばならない « la(la société) payer »」と述べるが、それは想像力に訴えかけはしない。なぜ死なねばならぬか、わからないのである。

Comment n'avais-je pas vu que rien n'était plus important qu'une exécution capitale et que, en somme, c'était la seule chose vraiment intéressante pour un homme !⁵¹

ムルソーは「死刑執行よりも重大なものはない」ことに気づく。死刑執行とは、人間が引き受けねばならない運命なのだ。死は「傲然たる確実性 « cette certitude insolente »」であり、すべての人間に避けられない。ムルソーは自らを、「受刑者 « le patient »」であると考えている。つまり、人間は死刑執行という運命、つまり死すべき運命を背負わされているのである。

こうした死の確実性を受け入れたムルソーは続いて、上訴のことを考える。上訴することは、死の執行猶予、すなわち死の先のばしを得るということである。ムルソーは上訴却下(死ぬ時)を仮定して次のように考える。

Plus tôt que d'autres, c'était évident. Mais tout le monde sait que la vie ne vaut pas la peine d'être vécue. Dans le fond, je n'ignorais pas que mourir à trente ans ou à soixante-dix ans importe peu puisque, naturellement, dans les deux cas, d'autres hommes et d'autres femmes vivront, et cela pendant des milliers d'années. Rien n'était plus clair, en somme. C'était toujours moi qui mourrais, que ce soit maintenant ou dans vingt ans. . . . Du moment qu'on meurt, comment et quand, cela n'importe pas,

⁵¹ *Ibid.*, p.205.

c'était évident.⁵²

人間は結局死ぬ定めなのだから、人生は生きるに値しない、今であろうと、20年後であろうと、死んでゆくのは自分である。マルソーはこのように推論を進め、上訴の却下を承認するに至る。それをマルソーは「諦め « *ma résignation* » 」と言っている。そして « *j'avais gagné une heure de calme*⁵³ » と述べるように、マルソーは平静を手に入れるのである。そしてこの時、マルソーは久しぶりにマリイのことを想起し、次のように述べている。

Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à Marie. Il y avait de longs jours qu'elle ne m'écrivait plus. Ce soir-là, j'ai réfléchi et je me suis dit qu'elle s'était peut-être fatiguée d'être la maîtresse d'un condamné à mort. L'idée m'est venue aussi qu'elle était peut-être malade ou morte. C'était dans l'ordre des choses. Comment l'aurais-je su puisqu'en dehors de nos deux corps maintenant séparés, rien ne nous liait et ne nous rappelait l'un à l'autre. À partir de ce moment, d'ailleurs, le souvenir de Marie m'aurait été indifférent. Morte, elle ne m'intéressait plus. Je trouvais cela normal comme je comprenais très bien que les gens m'oublient après ma mort. Ils n'avaient plus rien à faire avec moi. Je ne pouvais même pas dire que cela était dur à penser.⁵⁴

何日も手紙をくれないマリイに対しマルソーは、彼女は死刑囚の恋人であることに疲れたのかもしれない、病気かもしれない、あるいは死んだのかもしれない、と考える。マリイとマルソーの間には、今となっては引き離されてしまった肉体以外に互いを結びつけるものはなく、お互いを思い起こさせるものはそれ以外に何もないのである。マルソーにとって、もし彼女が死んだとしたらマリイはもう興味をそそらない存在になってしまうのだ。マルソーは、人は死んだ者のことをすぐに忘れてしまうのが普通だ、と考えているのである。マルソーは独房にいる間、ずっとマリイを求めていたが、「それももう終わった」のであり、これ以降マリイのことをもはや考えなくなるのである。

ところで、マリイという存在はマルソーにとって何を意味するのだろうか？ « *la couleur du soleil et la flamme du désir*⁵⁵ » を持つマリイは、この地上で感じるという喜び、« *la plus pure des joies qui est de sentir et de sentir sur cette terre*⁵⁶ » を象徴していると言えよう。

実はマルソーは自らの推論を進める途中で、何度も「喜悦 « *joie* » 」を感じ、それを押し

⁵² *Ibid.*, p.207-208.

⁵³ *Ibid.*, p.208.

⁵⁴ *Ibid.*

⁵⁵ *Ibid.*, p.210.

⁵⁶ *Ibid.*, p.262 (*Le Mythe de Sisyphe* から引用)

殺しているのだ。

À ce moment, ce qui me gênait un peu dans mon raisonnement, c'était ce bond terrible que je sentais en moi à la pensée de vingt ans de vie à venir.⁵⁷

30歳で死のうが、60歳で死のうが結局死んでいくのは自分なのだから大した違いはない、と述べつつも、これから先の20年を考えると、ムルソーは「おそろしい心躍り « ce bond terrible »」を感じるのだ。それは「はやりたつ血と肉の衝動 « cet élan du sang et du corps⁵⁸ »」であり、この地上で生きる喜びだと言えるだろう。ムルソーは「人生は生きるに値しない」と言いつつも、この地上において感じるという喜びがあることもまた、知っているのだ。しかしそれを押さえつけ、死を受け容れるのである。

先ほども述べたようにムルソーは独房にいる間、ずっとマリイを求めていた。しかしここで、「それももう終わった」と述べているように、死を受け容れ、平静 « calme » を手に入れると同時に、もうマリイのことを考えなくなるのである。つまり、ムルソーは地上における生の喜び、感覚の陶酔から遠ざかりそれを放棄したということだろう。

2. 司祭への怒り

そのような時に、司祭が訪問する。司祭はムルソーに、希望を持たねばならない、人間は罪深く、神の方へ向かうことで罪を洗い清めねばならない、といったことを語りだすのである。キリスト教徒にとって、この世界は「神なき人間の悲惨の場」でしかないのだ。たった今、この地上で生きる喜びを諦め、死の確実性を受け容れたムルソーに対し司祭は、人間は求めさえすれば来世に生きることができると言い、ムルソーに求めることに要求するのである。するとついにムルソーは大声で怒鳴りだし、司祭の襟首をつかみ、「喜びと怒りの入り混じった戦きと共に」思いのたけをぶちまけるのである。

Il n'était même pas sûr d'être en vie puisqu'il vivait comme un mort. Moi, j'avais l'air d'avoir les mains vides. Mais j'étais sûr de moi, sûr de tout, plus sûr que lui, sûr de ma vie et de cette mort qui allait venir. Oui, je n'avais que cela. Mais du moins, je tenais cette vérité autant qu'elle me tenait. J'avais eu raison, j'avais encore raison, j'avais toujours raison. . . . C'était comme si j'avais attendu pendant tout le temps cette minute et cette petite aube où je serais justifié. Rien, rien n'avait d'importance et je savais bien pourquoi. Lui aussi savait pourquoi. Du fond de mon avenir, pendant toute cette vie absurde que j'avais menée, un souffle obscur remontait vers moi à travers des

⁵⁷ *Ibid.*, p.207.

⁵⁸ *Ibid.*, p.208.

années qui n'étaient pas encore venues et ce souffle égalisait sur son passage tout ce qu'on me proposait alors dans les années pas plus réelles que je vivais.⁵⁹

ムルソーは司祭の生き方を、「死人のような生き方」だと批判する。司祭は実際なにも手にしていないが、反対にムルソーは、この世の真理をしっかりと捉えているのだ。ムルソーは、これまでの生き方、つまりすべては偶然によって支配されていて、いつ死ぬかわからないという不条理性ゆえに何物も重要ではないと考えてきた生き方が正しかったことを、司祭に向かって叫ぶのである。つまり、死の直前になり、死という結末ゆえに、ムルソーは自らの無関心さを肯定でき、またそのように生きてきた今までの自分の人生を肯定できたのである。

3. ママンへの理解

司祭が去ると、ムルソーは再び平静 « calme » を取り戻す。

Lui parti, j'ai retrouvé le calme. J'étais épuisé et je me suis jeté sur ma couchette. Je crois que j'ai dormi parce que je me suis réveillé avec des étoiles sur le visage. Des bruits de campagne montaient jusqu'à moi. Des odeurs de nuit, de terre et de sel rafraîchissaient mes tempes. La merveilleuse paix de cet été endormi entrainait en moi comme une marée.⁶⁰

ムルソーは眠り、「星々の光を感じて」目を覚ます。そして「夜と大地と塩の匂い」でこめかみが爽やかになるのを感じる。第1部では、こめかみに血が昇るのを感じるという場面が何度かでてくるのだが、こめかみに血が上るとは、肉体を感じ取る、生きていることを実感する、ということではなかったであろうか。ここでは反対に、肉体から解放された状態にあるのだ。そして「眠れる夏の夜の素晴らしい平和」が、自分の中に染み入って来るのを感じている。

À ce moment, et à la limite de la nuit, des sirènes ont hurlé. Elles annonçaient des départs pour un monde qui maintenant m'était à jamais indifférent. Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à maman. Il m'a semblé que je comprenais pourquoi à la fin d'une vie elle avait pris un « fiancé », pourquoi elle avait joué à recommencer.⁶¹

ムルソーはサイレンが鳴るのを聞き、「今や永遠に無関係になった世界への出発」を知ら

⁵⁹ *Ibid.*, pp.211-212.

⁶⁰ *Ibid.*, p.212.

⁶¹ *Ibid.*, p.212-213.

せていると述べている。ムルソーはいまや、人間たちの住む世界とは永久に無関係な状態に至ったことを実感しているのだ。なぜならムルソーには死刑執行が迫っており、再び刑務所の外へ出て生きることなどないのだから。

そしてこの時ムルソーは、久しぶりに母のことを考える。そして、母が「なぜ許婚を持ったか、生涯をやりなおすふりをしたか」を理解した、と述べる。それは母が死を目前にして、

「解放を感じ、すべてを再び全的に生きる備えをした」からなのだ。

Là-bas, là-bas aussi, autour de cet asile où des vies s'éteignaient, le soir était comme une trêve mélancolique. Si près de la mort, maman devait s'y sentir libérée et prête à tout revivre. Personne, personne n'avait le droit de pleurer sur elle.⁶²

ここでムルソーは、第1部第1章で述べていたことを繰り返している。第1部では、次のように述べていた。

Je regardais la campagne autour de moi. À travers les lignes de cyprès qui menaient aux collines près du ciel, cette terre rousse et verte, ces maisons rares et bien dessinées, je comprenais maman. Le soir, dans ce pays, devait être comme une trêve mélancolique.⁶³

第1部第1章と第2部第5章の該当箇所を比較してみると、動詞が«*devait être*»から«*était*»となっていることがわかる。*devoir*という動詞が消えているのは、三野氏の指摘通り⁶⁴、ムルソーが数々の経験を経て、確信へと至った、ということだろう。

母は養老院で人生の最後を迎え死に近づき、解放感を味わったのである。第1部第1章で、ムルソーはマレンゴの風景を通して、母が夕暮れ時に解放を感じたということを直観したのではなかろうか。そして第2部第5章で、死刑判決を言い渡されたムルソーは、母と同じく死を現実的で間近なものとして意識せざるを得なくなってしまうのである。ムルソーもまた、死を直視せざるを得なくなったのである。だから、あのマレンゴの夕暮れが、人間に解放をもたらしたことを確信したのである。

それは、おそらく死の恐怖から解放された、ということだろう。ムルソーはここに至って平静を取りもどし、「眠れる夏のすばらしい平和」に身を委ねることができたのである。もはや死の恐怖は払拭されている、と言ってよいだろう。母もまた同じようにマレンゴの夕暮れ時に、死の恐怖から解放されていたのだ。

しかし、死の恐怖から解放された母が、「すべてを再び全的に生きる」ということをムルソーが真に理解し悟ったのは、この場面に至ってはじめてであったろう。そしてムルソーも

⁶² *Ibid.*, p.213.

⁶³ *Ibid.*, p.149.

⁶⁴ 三野博司, *op. cit.*, p.138.

また、すべてを再び全的に生き直す決意を固めたのである。

Et moi aussi, je me suis senti prêt à tout revivre.⁶⁵

ムルソーは死刑判決を受け自らの死を直視して初めて母に対する真の理解を得ることができ、母への確信的な理解へと至ることができたのである。

かくしてムルソーは死刑執行の直前で母への確信的な理解へと至ったのであるが、ここで、この場面におけるムルソーとママンのつながりがどのようなものであったか整理しておきたい。

上で見たように、マリイのことを思い出した時ムルソーは、「肉体以外に 2 人を結びつけるものはなく、またお互いを思い起こさせるものはない」と述べていた。マリイとの関係において重要なのは肉体であり、マリイはこの地上における官能的喜びを象徴する人物であった。つまり、ムルソーとマリイの関係は感覚的で地上的なものであった。

一方、ムルソーは母のことを、人間たちの住む世界から、そしてマリイから遠く隔たった時に思い起こしている。すなわち、死を間近にひかえた状態で、また肉体から解放された状態で、母への確信的な理解へと至っているのだ。ということは、ムルソーとママンを結びつける絆とは、ムルソーとマリイをつないでいた地上的現世的なものとは違い、地上的なものとは別種の何か、ということになるだろう。この地上に生きて感じる喜びではないが、しかしムルソーにとっては価値のある何かであるだろう。その内実がどのようなものなのか明かにするためには、続く場面に登場する「世界の優しい無関心」について考察しなければならない。

⁶⁵ *Ibid.*, p.213.

(2) 世界の優しい無関心

先ずは、ママンとムルソーの結びつきがどのようなものなのか、その内実を明らかにするために、「世界の優しい無関心」という言葉に込められている意味について検討したい。次に、ムルソーの罪悪感が最終的にどこに行きついたかを明らかにしたい。また最後に、ムルソーが「ママンを理解した」という際の「comprendre」という動詞について、考えられることを述べておきたい。

1. 世界の優しい無関心

「全く生き返ったような思いがしている。」と述べた後、ムルソーはこう続けている。

Comme si cette grande colère m'avait purgé du mal, vidé d'espoir, devant cette nuit chargée de signes et d'étoiles, je m'ouvrais pour la première fois à la tendre indifférence du monde. De l'éprouver si pareil à moi, si fraternel enfin, j'ai senti que j'avais été heureux, et que je l'étais encore.⁶⁶

ムルソーは「このしるしと星々に満ちた夜」を前にして、はじめて、「世界⁶⁷の優しい無関心に心開いた」と述べる。この「世界の優しい無関心」という言葉はいささか唐突に出てくるような気もするが、この語の意味を探るには、『裏と表』の「肯定と否定の間」を参照する必要があるように思われる。「肯定と否定の間」とは、カミュが実の母のことを語っている、自伝的なエッセーである。

「肯定と否定の間」の中に、世界について、次のような一文がある。

・・・ le monde soupire vers moi dans un rythme long et m'apporte l'indifférence et la tranquillité de ce qui ne meurt pas.⁶⁸

世界は「死なざるもの」であり⁶⁹、「無関心と静寂」はそうした永遠性を持つがゆえの世界の属性なのである。

つまり、「世界の優しい無関心」という言葉には「死なざるもの」という意味が込められ

⁶⁶ *Ibid.*

⁶⁷ « monde » という単語は、自然という意味で使われることが多い。例えば「ルイ・ランジャール」にこのような一節がある。「L'autre jour, mère, j'étais monté sur les hauteurs de la ville. Et là aussi devant le monde je suis redevenu bien enfant et bien démuné comme lorsque je pense à toi.» (CEUC, I, p.96.

[Appendices de « L'Envers et l'Endroit », Louis Raingeard からの引用])

⁶⁸ CEUC, I, p.48. (L'Envers et l'Endroit, Entre oui et non から引用)

⁶⁹ 世界の永遠性について、『結婚』所収「アルジェの夏」では次のように述べられている。「Je sais seulement que ce ciel durera plus que moi. Et qu'appellerais-je éternité sinon ce qui continuera après ma mort ? » (CEUC, I, p.125. [Noces, L'Été à Alger から引用])

ていると考えられる。西永良成氏が、「死の恐怖を克服し、生への執着を忘れ去った意識が、初めて死を知らぬ「世界の無関心」に心を開き、それに同化する⁷⁰」と指摘している通り、肉体から解放され、また死の恐怖からも解放されたムルソーは、永遠性をはらんだ世界と一体化するのである。

ムルソーは第1部において、世界のただ中で感覚的に生きてきた。緑の夕べに満足を感じ、夏の夜気に心地よさを感じ、太陽の光に喜びを感じていた。そのように生きてきたムルソーは、やはり幸せだったのである。そして死の直前になっても、世界のまぢかにいることを感じ、今も幸せだと言うのである。ムルソーにとって死は、自然に同化する、つまり永遠性の中に入り込む、幸福ないとなみに他ならないのである。

ところで、カミュの作品において無関心という言葉は、母を形容するときの言葉でもある。なぜなら、序文でも触れたが、カミュの実の母親が、息子の目からは無関心さを持った人物として映っていたからである。本章(3)で詳しく述べるが、母の無関心さは、幼いカミュにとって苦悩のたねであった。しかし「肯定と否定の間」では、母の無関心さは肯定的な意味を付与され、以下のように描かれている。

L'indifférence de cette mère étrange ! Il n'y a que cette immense solitude du monde qui m'en donne la mesure.⁷¹

このように「母の不思議な無関心」は、世界と重ねられているのである。つまり、母の無関心さは、世界の持つ永遠性をはらむものであるとされているのである。

これを踏まえると、「世界の優しい無関心」という言葉にもまた、母のイメージが重ねられていると考えられるだろう。母のイメージが重ねられた「世界の優しい無関心」に心開き、それと一体化する、とは、ムルソーは母と死を超えた永遠性の中で再びひとつになれたということの意味しているだろう。

すなわち、ムルソーとママンのつながりとは、“永遠性”をはらんだものだったのである。ムルソーが第1部第1章で「ママンを理解した」と言った時、死をも超えた“永遠性”という母との絆が、ムルソーの内にあったのかどうかは、わからない。しかしながら、ムルソーは無意識的にそのことを感じ取っていたのかもしれない。

⁷⁰ 西永良成『《ふらんす双書》評伝アルベール・カミュ』、白水社、1976、p. 88.

⁷¹ *ŒUC*, I, p.50. (*L'Envers et l'Endroit, Entre oui et non* から引用)

2. ムルソーの罪悪感

物語の結末においてムルソーの母への罪悪感がどうなったのかについて、見ておきたい。上で見たようにムルソーは「*J'avais eu raison, j'avais encore raison, j'avais toujours raison.*」と言い、自分の人生の全てを肯定していた。死という結末ゆえに自らの無関心さを肯定したムルソーからは、母への罪悪感はやや消え去っているとと言えるだろう。

またムルソーは、母が人生の終焉を迎え死の恐怖からの解放を感じ、再び全的に生き直す気持になったことを感じたということを理解した時、次のように述べていた。

*Personne, personne n'avait le droit de pleurer sur elle.*⁷²

ママンは最後に生き返るのを強く感じていたのだから、何人もママンのことを泣く権利はない、とムルソーは言う。ゆえにママンのことを泣かなかった自分もまた、正しかったのである。本稿の第2章(2)において、ムルソーは埋葬の日の無関心さのことで母に罪悪感を持ったかもしれないと述べたが、ムルソーはここで、結局ママンのことを泣かなかった自分は正しかったことを、確信したのである。

ムルソーはまた、この言葉を、母の死を泣かなかった自分を憎んでいる人々、つまりムルソーを理解せず、死刑へと追いやった人々に向かって言っているのではないか。埋葬の日、ムルソーが「ママンを理解した」と言った時にうかがわれたように、ムルソーとママンの間には人知れずつながりがあったことを、ムルソーは彼らに言いたいのだろう。つまり、ムルソーとママンの関係は罪悪感よりもつながりの方が強かったのである。

3. « comprendre » について

ムルソーは「ママンを理解した」という台詞を、第1部第1章(「*je comprenais maman.*⁷³»)と第2部第5章(「*je comprenais pourquoi à la fin d'une vie elle avait pris un « fiancé », pourquoi elle avait joué à recommencer*⁷⁴»)で述べている。ここでは両箇所とも「comprendre」という動詞が使われているが、実はこの「comprendre」という語は、『異邦人』に何度も出てくる語なのである。すなわち、この語が『異邦人』においてキーワードとなる語である、ということだろう。

人と人における「comprendre」＝理解するとは、人と人をつなぐものであるだろう。他者と自分の内に共通のものがあるとき、すなわち共感できるときに、「理解する」ことが可能であるだろう。もしそれが無い時は、相手が自分にとって、あるいはお互いが不可解なものになってしまうだろう。

⁷² *Ibid.*, p.213.

⁷³ *Ibid.*, p.149.

⁷⁴ *Ibid.*, pp.212-213.

『異邦人』第2部においては、ムルソーのことを理解せずに誤解する人間が多く登場するため、この「comprendre」という動詞はとりわけ否定形で使われることが多いのである。ムルソーは人々から理解されなかったために、死刑となってしまったのであった。

ゆえに、『異邦人』において、否定形ではない「comprendre」という語には、重みが備わっているとと言えるだろう。ムルソーが「ママンを理解した」と言うこの言葉は大きな意味を持つ言葉であるのだ。つまり、ムルソーとママンのつながりを証する言葉であったのである。

ここまでで、本稿の目的である、『異邦人』におけるムルソーとママンの関係とはどのようなものなのか、明かすことができたように思われる。

続く本章(3)では、カミュの自伝的作品「ルイ・ランジャール」における母子関係について言及し、(4)では、『異邦人』のムルソーとママンの関係のもうひとつの読み方の可能性を提示したい。

(3) 「ルイ・ランジャール」における母子関係

序論でも触れたが、「ルイ・ランジャール」とは、1934年から36年の間に書かれたカミュの最初の小説草稿である。母子がその中心テーマとなっており、そこに描かれている事柄のほとんどは実体験をもとにしたものである。

以下では、「ルイ・ランジャール」とはどのような作品か紹介し、また、「ルイ・ランジャール」と、「ルイ・ランジャール」と重複している内容の『裏と表』『肯定と否定の間』において母子がどのように描かれているかを述べておきたい。さらに、カミュと実の母の関係の芸術化という観点から、考えられることを述べたい。

1. 「ルイ・ランジャール」について

「ルイ・ランジャール」は実体験を基にした内容であり、三人称の形式で書かれている。語られるのは、祖母と母、叔父、兄とカミュの5人で暮らしていた幼少期、祖母が亡くなった後の母と叔父の生活、カミュが結核に罹ったこと、家を離れた一人暮らしの生活などである。あらすじは、これらの数々の出来事を経て、母とカミュがそれぞれ孤独に陥っていく。そして、その果てで二人の間に深い絆を見出す、というものである。以下は、カミュの手帳に残された「ルイ・ランジャール」のプランの覚書である。

I Le Q<uartier> P<auvre>

Chap. I. *Le point de crise*

Chap. II. La lente désagrégation qui a mis cette femme face à face avec son fils

Mort de la grand-mère

Maladie du fils

Séparation d'avec le frère

Chap. III. Expérience parallèle du fils rejeté par deux choses :

Abandon de la vieille femme du palier

Mort du vieil oncle

Seuls aux deux bouts de la ville—Se voyant de temps en

temps

2 infinis

II La M<ère> et le F<ils>

Premier point de compréhension

Attrance incurable

III *Le Dernier retranchement*

Le Retour à l'essai : 8 jours

Symbole

La vieille Le vieux

Départ

75

Iの「*Le Q<u>artier> P<a>uvre>*」は、母子がそれぞれ孤独になっていくまでが描かれている。祖母が死んだ後、ルイは結核に罹り、家が貧しかったために叔父（同居している叔父とは別の）の家に引き取られる。そして母は弟と2人暮らしを始める。しかし弟は母に対して横暴な態度を示したため、母は家を出ていってしまう。一方息子は叔父の家を離れ、大学に通いながら一人暮らしをすることとなる。こうして母子は離れ、それぞれに孤独の経験を積んでいくのである。IIでは、母と息子が再びひとつに結び付けられる様子が描かれる。息子は、生まれ育った貧民街とは隔てられている富裕層の地区にある大学に通い勉強に励むという、貧困から離れた生活を送っている。しかし、自分が真実から遠く離れていて、それは母がその象徴である貧困の中にこそあるのだ、ということを感じる。そして息子は再び貧困の世界へと戻り、母と自分を結ぶ絆を見出すに至るのである。IIIの部分の草稿は見つかっておらず、レヴィ＝ヴァランシイは、カミュはこの部分を書くことなくこの小説を放棄した、と述べている⁷⁶。

2. 孤独＝母子の絆

次に、「ルイ・ランジャー」の内容と重複している『裏と表』『肯定と否定の間』に描かれる孤独という母子の絆について見ていく。

「肯定と否定の間」では「孤独」が母とルイをつなぐ絆として描かれている。しかしそれは絆とされる前に、ルイにとって恐れとして捉えられるのだ。まだ子供の頃に、孤独な母を前にし、孤独と共に恐れを感じるのである。

Quelquefois, comme en ces soirs dont lui se souvenait, revenue du travail exténuant . . . , elle trouve la maison vide. . . . Elle se tasse alors sur une chaise et, les yeux vagues, se perd dans la poursuite éperdue d'une rainure du parquet. Autour d'elle, la nuit s'épaissit dans laquelle ce mutisme est d'une irrémédiable désolation. Si l'enfant entre à ce moment, il distingue la maigre silhouette aux épaules osseuses et s'arrête : il a

⁷⁵ *ŒUC*, I, p.1225. (Appendices de « *L'Envers et l'Endroit* », Louis Raingeard, Notes から引用)

⁷⁶ Jacqueline LÉVI-VALENSI, *Albert Camus ou La Naissance d'un Romancier*, Gallimard, 2006, p.211.

peur.⁷⁷

母は宵闇が濃くなってゆく中で、「ぼんやりとした両目を凝らして床板の溝を追っていくうちに」我を忘れてしまう。無思考状態で闇に溶け込む母の「動物のような沈黙」を前にし、「彼」は恐怖を感じるとともに、孤独を感じたであろう。しかしこの瞬間は、次のように続けられる。

Tout à l'heure, la vieille rentrera, la vie renaîtra : la lumière ronde de la lampe à pétrole, la toile cirée, les cris, les gros mots. Mais maintenant, ce silence marque un temps d'arrêt, un instant démesuré. . . .

Elle ne pense à rien. Dehors, la lumière, les bruits ; ici le silence dans la nuit.⁷⁸

「彼」は何も考えていない母を前に、畏敬の念を抱く。しかし、母子ともに孤独であるこの沈黙は、「時間の停止」であり、「限りない一瞬」＝永遠を感じさせてくれる瞬間とされるのである。

また、母子が対面した孤独な時間について、もう一つ別の挿話がある。ルイは実家を離れ一人で暮らしていたのであるが、ある夜、母が自宅で暴漢に襲われたとの連絡が入り、一晩を母のもとで過ごす。

Ce n'est que plus tard qu'il éprouva combien ils avaient été seuls en cette nuit. Seuls contre tous. Les « autres » dormaient, à l'heure où tous deux respiraient la fièvre. . . . Non cependant sans emporter l'image désespérante et tendre d'une solitude à deux. Plus tard, bien plus tard, il devait se souvenir de cette odeur mêlée de sueur et de vinaigre, de ce moment où il avait senti les liens qui l'attachaient à sa mère⁷⁹.

「他の人々」が眠っている中で、母子はたった二人きりだった。その時間には、「二人きりの孤独という絶望的で優しいイメージ」が流れていたのである。そしてルイはこの瞬間に、

「彼を母に結びつける絆」を感じたのだ。

以上の2つの場面に見られるように、これらの母子の対面は、孤独を感じさせるのだが、しかし「時間の停止」であり「限りない一瞬」を刻むものであり、母子を結ぶ絆を感じる瞬間なのである。

ところで、ここでは、恐れや孤独という一般にマイナスのイメージを持つ観念が、永遠性や絆というプラスのイメージをもつものへと反転していることに気づかされる。そこにはやはり意図的な反転があるのである。つまり、カミュと実の母との関係が関わっているので

⁷⁷ *ŒUC*, I, p.49. (*L'Envers et l'Endroit, Entre oui et non* から引用)

⁷⁸ *Ibid.* pp.49-50

⁷⁹ *Ibid.*, p.51. (*L'Envers et l'Endroit, Entre oui et non* から引用)

ある。レヴィ＝ヴァランシイが、カミュを母から引き離すもの、すなわち母の無関心さ « *indifférence* » や無思考 « *non-pensée* » が、母子の永続する絆を取り戻させるものとされていることを指摘しているが⁸⁰、そこにはそうした無関心で何も考えていない母に対する息子の苦悩があり、母のそうした態度を芸術へと高めることにより、現実を再解釈したのだと考えられるのである。

3. 母の無関心

カミュの実の母は「無関心」という言葉で形容されることが多い。序文においても触れたが、以下では、「ルイ・ランジャール」にどのように母の無関心が描かれているか見てみたい。

主人公ルイは 17 歳の時に、当時は不治の病であった結核に罹るのであるが、母はその際に、無関心な態度しか示さなかったのである。息子を失うかもしれない恐怖や絶望という感情を表さなかったのだ。カミュはそれを、「奇妙な態度 « *l'attitude singulière* » 」と言っている。

Une chose encore que Louis ne s'était jamais expliquée, c'est l'attitude singulière de sa mère lors d'une maladie assez grave qui avait atteint son fils. Lors des premiers symptômes, des crachements de sang très importants, elle ne s'était guère effrayée, avait certes marqué une inquiétude—mais celle qu'un être de sensibilité normale porte au mal de tête qui afflige l'un de ses proches. Il la savait pourtant d'une émotivité bouleversante, il savait d'autre part qu'elle avait pour lui un grand sentiment.⁸¹

母は、ルイが多量に咯血した時も、少しも怯えなかったのである。しかし母は感受性を持っていない訳ではないし、ルイを愛していない訳でもない。ただそれを、表にはあらわさなかったのである。

ルイの家は貧しかったので、治療のために金のある叔父の一人が彼の世話を引き受けることになる。

Par la suite encore, elle ne s'occupa jamais de cette maladie qui devait durer très longtemps. Ce fut un de ses oncles qui s'occupa de lui et sa mère, pas à redire. Elle venait le voir chez cet oncle, s'enquérât de son état, « Tu vas mieux », « Oui ». Elle se taisait alors et restés face à face tous deux s'épuisèrent en efforts pour trouver quelque

⁸⁰ Jacqueline LÉVI-VALENSI, *op. cit.*, p.254.

⁸¹ *CEUC*, I, pp.91-92. (Appendices de « *L'Envers et l'Endroit* », *Louis Raingeard* から引用)

chose à dire. On [lui *biffé*] disait à Louis qu'on l'avait vue pleurer. Mais jusqu'à ces larmes lui semblaient de conviction moyenne.⁸²

母は、しまいにルイの病気に関心を持たなくなる。ルイの世話を引き受けたのは叔父であり、母は時々この叔父の家へルイに会いに来た。しかし、互いに何も話すことがなく、結局は黙り込んでしまうのである。ゆえにルイは、母が泣いていたことを人から聞いても、それが心からなされたもの、つまり息子の死への恐怖を抱いている、とは思われなかったのである。

しかしルイは、母の無関心に込められた本当の意味を見出している。

Elle n'ignorait pourtant pas la gravité de son mal. Mais elle promenait ainsi sa surprenante indifférence. Plus étonnant encore à la réflexion était ce fait qu'il n'avait jamais songé à le lui reprocher. Une entente tacite les liait. Et lui-même se souvenait de n'avoir éprouvé qu'une crainte médiocre lors d'une maladie de sa mère.⁸³

母の「驚くべき無関心さ」に対し、ルイは母を非難しようとは決して思わないのである。なぜなら「ある暗黙の合意」が彼らを結びつけていたからだ、とルイは述べる。そして彼も、母が病気の時に大した心配をしなかったのである。つまり、ルイは母の無関心さを自らのものとし、それを彼らを結ぶ絆とするのだ。

Au contraire, il avait le sentiment aigu, douloureux même de la mort des autres. Dans le monde de son expérience, cela donnait même un sens à la vie. Une exception cependant et c'était sa mère. Il n'avait jamais craint qu'elle mourût. C'est ainsi qu'il expliquait sa propre indifférence. Et il faut bien dire que dans le regard de sa mère il lisait la même conviction. Elle portait inconsciemment en elle l'idée d'une commune pérennité. Elle doutait que rien les séparât jamais. Elle ne doutait même pas. Elle n'y pensait pas—⁸⁴

ルイにとって、他人の死は絶望、生きる意味の喪失、といった意味を持つものであったが、しかし、「彼」は母の死は恐れていなかったのである。母子ともに、お互いの死に無関心であったのだ。なぜなら、母子の間には、「*l'idée d'une commune pérennité*」があったからである。つまり、互いに死んでも母子には死を超えたつながりがあったのである。

カミュと実の母の関係という観点から述べると、こうした母の無関心さに永生の観念を付

⁸² *Ibid.*, p.92. (Appendices de « *L'Envers et l'Endroit* », Louis Raingeard から引用)

⁸³ *Ibid.*

⁸⁴ *Ibid.*, pp.92-93. (Appendices de « *L'Envers et l'Endroit* », Louis Raingeard から引用)

すという無関心の芸術化の裏には、母の無関心さゆえの心の傷があったことは確かである。なぜならカミュの草稿には、このような一文も見受けられるからである。

II . . . tomba un jour malade gravement. . . Sa mère ne s'était pas occupée de lui.
Indifférence ? non mais caractère étrange et presque surnaturel. Elle était d'un autre monde.⁸⁵

ここでカミュは、母は無関心なのか? と自問している。そしてそれを否定し、奇妙な性質、ほとんど超自然的な性質と述べ、「別の世界にいる」としているのだ。やはりここにおいても母の無関心を芸術化しているのである。

また本稿では、序文で述べたように、この「ルイが母から家を追い出される」という挿話と類似した「ムルソーがママンを養老院へ入れる」という挿話に注目した上で、母子関係を検証したのであった。そして彼らのつながりが「永遠性」であることを明らかにしたが、そうした「永遠性」という母子のつながりは、「ルイ・ランジャール」においても描かれているものであったのである。やはりこの「ルイ・ランジャール」という作品は、『異邦人』の母子関係に大いに影響している作品なのである。

⁸⁵ Jacqueline LÈVI-VALENSI, *op. cit.*, p.252.

(4) 『異邦人』における母子関係—もう一つの解釈の可能性—

1. 『異邦人』における母子関係—永生の観念—

「ルイ・ランジャール」において、母とルイは“永生の観念”によって結ばれている、と描かれていた。ゆえに、お互いがお互いの死を恐れてはいないのだ、と。ルイがそうした絆を発見したのは、“ルイが家を追いやられた”という出来事に関連してのことだった。では、「ルイ・ランジャール」におけるルイと母の状況と類似している『異邦人』のムルソーと母の間においても、冒頭からそのような絆があると解釈することが可能なのではないだろうか？つまり、冒頭から母との間には“永遠性の観念”があったのだ、という様に読むことが可能なのではないだろうかと思われるのである。なぜなら、この『異邦人』という小説は、1人称の語り手が自己の感情を一切語っていないからである。ゆえに、様々な解釈の仕方が可能であると思われるのである。先ほど本稿で明かしたムルソーとママンの関係とは、“罪悪感とつながり”という2重性を持ったものであった。しかし、彼らの関係をこうした2重性を持ったものとは捉えずに、冒頭から母との間には罪悪感などなく絆だけがあった、と解釈することもまた可能なのではないだろうか。

以下では、『異邦人』における母子関係のもうひとつの解釈として、その可能性を提示してみたい。

ムルソーが母の死を泣かなかった訳は、母との間にあった永生の観念で説明することが可能である。つまり、ムルソーにとって母の死は、母との絆ゆえに何でもなかったのだ。しかしそのように解釈すると、説明しかねる事柄がでてくる。それは、ムルソーが母の遺体を見ることを拒否しているという事実である。先に述べたように、ムルソーと母の関係を2重性として捉えた際は、ムルソーが遺体を見なかった訳を、ムルソーの罪悪感ゆえに母の死の受容を拒んだためだ、と説明した。しかし、もし母の死を恐れていないとしたら、母の死の受容を拒む必要はないはずである。なぜムルソーは母の遺体を見なかったのか、次にこの問題を考察したい。

2. ムルソーが遺体を見なかった訳

第1部第1章で、ムルソーが遺体を見ることを拒否した後、通夜が始まるまでの間に、次のような場面がある。

Il avait soixante-quatre ans et il était parisien. À ce moment je l'ai interrompu : « Ah, vous n'êtes pas d'ici ? » Puis je me suis souvenu qu'avant de me conduire chez le directeur, il m'avait parlé de maman. Il m'avait dit qu'il fallait l'enterrer très vite, parce que dans la plaine il faisait chaud, surtout dans ce pays. C'est alors qu'il m'avait appris qu'il avait vécu à Paris et qu'il avait du mal à l'oublier. À Paris, on reste avec le mort trois, quatre jours quelquefois. Ici on n'a pas le temps, on ne s'est pas fait à l'idée

que déjà il faut courir derrière le corbillard. ⁸⁶

門衛が自分はパリ出身だと言うとムルソーは、門衛を「この人（アルジェリアの人）ではない」と述べる。そしてその時、院長の部屋へ行く前、つまりムルソーが遺体安置所で母の遺体を見ることを拒否する前に、門衛が以下のことを話していたことを思い出すのである。

この土地は暑いから、「いそいで埋葬せねばならない」。パリでは、3, 4日も、死者と一緒に居ることがあるが、ここではその暇はない。なぜなら、遺体はすぐに腐敗してしまうからだ。

ムルソーは、母の棺と対面する前に、門衛とこのような会話をしていたのである。ムルソーは養老院に着いてすぐの時点では、「*J'ai voulu voir maman tout de suite.*⁸⁷」と述べている。ということはつまり、ここで門衛が語ったことを聞いて、ムルソーが母の遺体を見ることを拒否した、という可能性もあるのだ。

門衛は「いそいで埋葬せねばならない。野原は暑い、この地方では特に暑いから」と語っているが、ムルソーがこの話を聞いて何を感じたか推測するために、ムルソーがそうであるアルジェリアの人びとにとって死とはどのようなものなのかを述べたい。

まず、アルジェリアの人びとにとって、魂というものは存在しない。人は死んだら、ただ肉体だけが残るのである。『シーシュポスの神話』に「*De ce corps inerte où une gifle ne marque plus, l'âme a disparu*⁸⁸」とあるように、遺体からは魂は消えてしまっているのである。

また、アルジェリアの人びとについて語ったエッセーである『結婚』（1938）所収「アルジェの夏」に次のような一節がある。

Tout ce qui touche à la mort est ici ridicule ou odieux. . . . Je ne connais pas d'endroit plus hideux que le cimetière du boulevard Bru, en face d'un des plus beaux paysages du monde. . . . « Notre souvenir ne t'abandonnera pas », feinte sinistre par quoi on prête un corps et des désirs à ce qui au mieux est un liquide noir.⁸⁹

アルジェリアの人々は肉体の讃嘆に生き、神話も慰めも持たないため、死に対しては無防備のままなのだ。死の神聖さなどわからない彼らは死について冗談を言い合う。別の場合は、彼らにとって死は、深い恐怖ゆえにおぞましいものであるのだ。アルジェリアでは墓に掲げられた文句は「不気味な装い」であり、遺体は「たかだか黒い液体である物」に過ぎないの

⁸⁶ *CEUC*, I, p.144.

⁸⁷ *Ibid.*, p.142.

⁸⁸ *Ibid.*, p.229. (*Le Mythe de Sisyphe* からの引用)

⁸⁹ *Ibid.*, pp.122-123. (*Noces, L'Été à Alger* から引用)

である。つまり、アルジェリアの人びとにとって死は醜悪なものなのである。

ムルソーが母との間に持つ“永生の観念”とは、神秘性を帯びたものであるだろう。また、物語の結末における“世界への同化というムルソーの死”もまた神秘性を持ったものであるだろう。先に述べたように、ムルソーは不死性を持つ世界に同化することによって、母と永遠性の中で再びひとつになれたのであった。

要するに、もしムルソーが遺体を見ていたら、母との永生の絆という神秘的なイメージを保つことが不可能ではなかったのではないかと思われるのである。なぜなら、アルジェの男であるムルソーにとって死は醜悪なものだからである。もしムルソーが目の前に横たわる魂の抜けた遺体を目にしていたら、たとえ 2 人の間に“永遠性の観念”なるものの存在を確信していたとしても、そのようなイメージを持することができなかったのではないだろうか。ムルソーはそのことを直感し、母の遺体を見ることを拒否したのではないかと考えられるのである。

ここでは、本研究で明かした『異邦人』における母子関係とは異なる母子関係の解釈の仕方の可能性を提示したに過ぎない。しかし、そうした、全く別様の解釈を可能とするところに、『異邦人』という小説の謎と奥深さがあるだろう。

結論

本稿で明かした母子関係とは、ムルソーが母に対し、罪悪感とつながりという2つの思いを抱いていた、というものであった。物語を辿るにつれて、ムルソーの内面において、罪悪感よりもつながりの方が優り、結末においては、もはや罪悪感は消え去り母と再びひとつになることができたのであった。

本稿の最後に、生前の母とムルソーの関係について言及し、結論としたい。

ムルソーと母が同居していた頃の2人の関係がどのようなものであったかは、あまり語られていない。しかし、ムルソーが養老院の件を正当化する言説に、それを垣間見ることができた。すなわち、“お互いにもう話すことはなかった”のである。言葉を交わし合うことでつながりを得ることができる訳ではないだろうが、しかしまたムルソーは家での母の様子を次のように語っているのである。

Quand elle était à la maison, maman passait son temps à me suivre des yeux en silence.⁹⁰

母がまだアパートにいた頃、母はただ黙ってムルソーを見つめていたのである。つまり互いに見つめ合うことはなかったのだろう。第2部第2章には、この様子とは真逆の母子が描かれている。それはムルソーが刑務所の面会室で目撃するアラブ人の母子で、「二人とも異常な激しさで、互いに見つめ合っていた」とムルソーは述べている。この関係はおそらくムルソーにとって理想の関係なのであろうが、母と共に暮らしていた頃、ムルソーは母とこのような関係にはなかったのだろう。お互いに言葉を交わすこともなく、その上互いに見つめ合うこともなかった。つまり、ムルソーと母は、一緒に暮らしながらも、それぞれに孤独を感じていたのではないだろうか。少なくともムルソーはそう感じていたのだろう。しかし『裏と表』所収「肯定と否定の間」描かれているように、その孤独に絆を見い出していたとは言い難いだろう。

また、ムルソーは「母が養老院に来た最初の頃に泣いたのは、家での暮らしに慣れていなかったからであった」とも述べていた。つまり、母はそこに幸せを見出してはいなかった、とムルソーは言っているのである。

つまり、ムルソーにとって母との暮らしは、母とのつながりを感じていたものではなかったのだろう。しかし、ムルソーの方は母のことを見つめてはいなかったのであるが、母はムルソーのことを見つめていたのであった。ということは、ムルソーのことを見つめていた母の方では、ムルソーとの絆を感じていたのだろうか？それは断定しかねるが、要するに、ムルソーは母の生前、母との間にあった絆に気づくことができなかつたのではないだろうか。

⁹⁰ *Ibid.*, p.142.

『異邦人』は、母とのつながりに気づいていく物語なのではないか。しかし、この物語は母の死から始まっている。つまりは母もう死んでしまっているのだ。そのために、ムルソーは自らの死をもって、母とのつながりを確信的なものにしなければならなかったのではないだろうか。

参考文献

【カミュ作品（原書）】

Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006.

---. *Téâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993.

---. *Essais*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1991.

---. *Carnets I : mai 1935 — février 1942*, Gallimard, 2013.

---. *Carnets II : janvier 1942 — mars 1951*, Gallimard, 1964.

---. *Carnets III : mars 1951 — décembre 1959*, Gallimard, 1989.

---. *La Mort heureuse*, Gallimard, « Cahiers Albert Camus 1 », 1971.

---. *Le Premier Homme*, Gallimard, « Cahiers Albert Camus 7 », 1994.

【カミュ作品（邦訳）】

『カミュ全集』全10巻，佐藤朔・高畠正明編集，新潮社，1972-1973.

『カミュ著作集Ⅰ』，宮崎嶺雄訳，新潮社，1968.

『幸福な死』，高畠正明訳，新潮社，1972.

『直観』，高畠正明訳，新潮社，1974.

『カミュの手帖』，大久保敏彦訳，新潮社，1992.

『シーシュポスの神話』，清水徹訳，新潮文庫，2006.

『最初の人間』，大久保敏彦訳，新潮社，2012.

【先行研究】

Pichon-Rivière, Arminda A. de, et Baranger, Willy. (mai-juin 1959) : « Répression du deuil et intensification des mécanismes et des angoisses schizo-paranoïdes (Note sur l'Étranger de Camus) », in *Revue française de psychanalyse*.

Jean Grenier, *Albert Camus souvenirs*, Gallimard, 1969.

Alain Costes, *Albert Camus ou la parole manquante, étude psychanalytique*, Payou, 1973.

Jean Sarocchi, *Le Dernier Camus ou le premier homme*, NIZET, 1995.

Jacqueline Lèvi-Valensi, « L'Étranger : un meurtrier innocent ? », in Jean Bessière(dir.), *Roman et crimes*, Honoré Champion, 1998.

---. *Albert Camus ou La Naissance d'un Romancier*, Gallimard, 2006.

T
o
La nostalgie originelle dans l'œuvre de Camus», *Stella*, n°27, 2008, pp.125-
Dictionnaire *Albert Camus*, Sous la direction de Jeanyves Guérin, Robert Laffont, 2009.
o
k
o

A

n

, 152.

- ロジェ・キーヨ『アルベール・カミュ』，室淳介訳，白水社，1957.
- ジャン＝ポール・サルトル『シチュアション I』，窪田啓作訳，人文書院，1965.
- ロラン・バルト『零度のエクリチュール』，渡辺敦訳，みすず書房，1971.
- 西永良成『《ふらんす双書》評伝アルベール・カミュ』，白水社，1976.
- モーリス・ブランショ『カミュ論』，清水徹・栗津則雄訳，筑摩書房，1978.
- 東浦弘樹「カミュ家の肖像『最初の人間』と『裏と表』」，『フランス研究』，N°30，関西学院大学フランス文学会，1996，pp.150-162.
- ロベール・シャンピニイ『カミュ「異邦人」のムルソー』，平田重和訳，関西大学出版部，1997.
- エドワード・W・サイード『文化と帝国主義 1』，大橋洋一訳，みすず書房，1998.
- 松本陽正『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』，駿河台出版社，1999.
- エマニュエル・ロブレス『カミュ—太陽の兄弟』大久保敏彦・柳沢淑枝訳，国文社，1999.
- 三野博司『カミュ「異邦人」を読む—その謎と魅力』，彩流社，2002.
- 野崎歓『カミュ『よそもの』きみの友だち』（理想の教室），みすず書房，2006.
- クリスティアーヌ・ショーレ＝アシュール『アルベール・カミュ、アルジェ』大久保敏彦，松本陽生訳，国文社，2007.
- 高塚浩由樹「『ルイ・ランジャール』と『最初の人間』の間の往復運動—アルベール・カミュの円環的行程と母親への告白」，『国際関係研究』，N°28，日本大学国際関係学部国際関係研究所，2008，pp.245-267.
- 安藤智子「カミュ『裏と表』—ノスタルジーの昇華—」，『Stella』，n°28,2009,pp.152-162. 東浦弘樹『晴れた日には『異邦人』を読もう—アルベール・カミュと「やさしい無関心」』，世界思想社，2010.
- 千々岩靖子『カミュ 歴史の裁きに抗して』，名古屋大学出版会，2014.

【伝記】

- ハーバート・ロットマン『評伝 アルベール・カミュ』，大久保敏彦訳，清水弘文堂，1982.
- オリヴィエ・トッド『＜ある一生＞アルベール・カミュ』（上）（下），有田英也・稲田晴年訳，毎日新聞社，2001.

【その他】

- 『実存主義辞典』，松浪信三郎・飯島宗享編，東京堂出版，1970.
- 久重忠夫『罪悪感の現象学—「受苦の倫理学」序説—』，弘文堂，1988.
- 『新約聖書』日本聖書協会，1988.
- 松浪信三郎『実存主義』，岩波書店，1990.
- 山我哲雄『キリスト教入門』，岩波書店，2014.

平成29年度 修士論文

A Cognitive Approach to English Education
: A Study on Participial Construction

信州大学大学院人文科学研究科 言語文化専攻

16LA102K 伊東勇人

Contents

0. Abstract	64
1. Introduction	64
2. Analysis on Participial Construction without Conjunctions	66
2.1. Analysis on Participial Construction without Conjunctions: Hayase(1992)	66
2.2. Consideration	68
2.2.1. The differences between Preposing and Postposing	69
2.2.1.1. The Meaning of Preposed Participial Clauses	70
2.2.1.2. The meaning of Postponing Participial Clauses	70
2.2.1.3. Summary of the Differences between Preposing and Postposing	71
2.2.2 The Differences of Usage between Native Speakers and Japanese Students	72
2.2.2.1. Beginner Students	73
2.2.2.2. Idiom	74
2.2.2.3. The Meaning of <i>Reason/Cause</i>	75
2.2.2.4. The Meaning of <i>when</i>	75
2.2.2.5. The Meaning of <i>Attendant Circumstance</i>	76
2.2.2.6. Summary of the Usage of Japanese Students	77
2.2.3. Studies of Iconic Principal of Sequential Order	78
2.3. Summary	79
3. Analysis on Participial Construction with Conjunctions	79
3.1. Previous Studies on Participial Construction with Conjunctions	79
3.2. Consideration of Participial Construction with Conjunctions	81

3.2.1. Participial Construction with the Conjunction <i>While</i>	81
3.2.1.1 The Position of Concession	82
3.2.1.2. The Position of Simultaneity	83
3.2.2. Participial Construction with the Conjunction <i>When</i>	84
3.2.3. Summary	87
3.3. Participial Construction with the Conjunction of Reason	87
3.3.1. Syntactic Approach	87
3.3.2. Semantic Approach	89
4. Conclusion for Chapters 1-3	89
5. The Education Effect of our Teaching Model	90
5.1. The Present Situation in English Education	91
5.1.1. The Participial Construction in Current Textbooks	91
5.1.2. The Participial Construction in the Current Grammar Books	91
5.2. Methods	93
5.2.1. Participants	93
5.2.2. The Overview of the Experiment	95
5.3. The Result of the Pre-test and Post-test	95
5.4. Results of Questionnaire	98
6. Conclusion	99
Acknowledgement	101
References	101

0. Abstract

This study analyzes participial construction and aims to clarify the differences between the participial construction without conjunctions and the participial construction with conjunctions. Chapter 2 focuses on the participial construction without conjunctions and provides an analysis of the participial construction without conjunctions. Chapter 3 deals with the participial construction with conjunctions by comparing with the findings in Chapter 2. To consider why conjunctions are added to participial constructions, the present study collected examples from the Corpus of Contemporary American English (COCA) and analyzes the differences between preposed and postposed participle clauses. With this analysis, we argue that the order of clauses plays a role in showing the ground: i.e., the ground can either be expressed by adding the conjunction *while*, or by putting the clauses that express the ground in front. However, in the case of the participle clause with the conjunction *when*, we could not see such differences in the position; the clause with *when* can either be preposed or postposed. Probably, this is attributable to the fact that *when* shows simultaneity. Also, through this analysis, we propose a better teaching method for Japanese English as a Foreign Language (EFL) learners.

1. Introduction

Japanese students usually think of the *-ing* form as typical usage of the progressive form. This occurs because Japanese learn the progressive expression first as a basic usage of an *-ing* form. However, the *-ing* form has many other usages. It is very confusing for Japanese students who learn English.

First, we look at examples of the *-ing* form used by Japanese students and compare them with native speakers' usage. We highlight the difference in usage of the *-ing* form between Japanese students and native speakers by using two corpuses. We collected 78 *-ing* form

examples from the Corpus of English Essays Written by Native Speakers (CEENAS) and 65 examples from the Corpus of English Essays Written by Japanese University Students (CEEJUS) (beginner class)¹. The outcome makes it clear that beginner Japanese students did not use participial construction. This implies that Japanese students are poor at using participial construction.

In fact, Japanese EFL learners have difficulty in fully mastering participial construction because its meaning is ambiguous and they are taught several meanings of the participial construction. For example, Sentence (1) can be construed as having the meaning of time and meaning of reason:

(1) Seeing the police officer, he ran away. (Watanuki 2000: 522)

Adding a conjunction to participial construction can solve this problem. The conjunction can define the meaning, as Ando (2005) argues. We review his theory in Section 3.1.1.

This ambiguity gives rise to another question: “What is the difference between participial construction without conjunctions and participial construction with conjunctions?,” which, according to the notion of iconicity (Bolinger 1977: 19), must differ in meaning. This paper clarifies the difference between the two by considering the position of the participle clause.

In Chapter 2, we analyze participial construction without conjunctions. Chapter 3 examines participial construction with conjunctions by comparing with participial construction without conjunctions. In Chapter 5, we show that our findings based on cognitive linguistics

¹ In this paper, we use CEEJUS (Corpus of English Essays Written by Japanese University Students) and CEENAS (Corpus of English Essays Written by Native Speakers), following Ishikawa et. al. (2010). The topics are restricted to “It is important for college students to have a part time job” and “Smoking should be completely banned at all the restaurants in this country.” In CEEJUS, the essays are classified based on the Test of English for International Communication (TOEIC) score.

(CL) are effective for Japanese EFL learners.

2. Analysis on Participial Construction without Conjunctions

We begin by examining participial construction without conjunctions by focusing on its meaning and position. Also, we provide an analysis that compares the participial construction used by native speakers and that used by Japanese EFL students. However, we will review the previous study first.

2.1. A Previous Study of Participial Construction without Conjunctions: Hayase (1992)

Hayase (1992) studied the problem of participial construction. The study examined each type of participial construction and suggested an image schema that schematizes each meaning as a whole. She provided examples to illustrate her analysis:

(2) Offering a prayer, she was thinking about Bill.

(3) Walking along the street, I met her.

(4) Offering a prayer, she went to bed.

(5) A lamp suddenly went out, leaving us in utter darkness.

(6) Looking back, she threw a kiss to me. (Hayase 1992: 12-14)

In Sentence (2), the participle clause X shows the state *offering a prayer*, and the main clause Y shows the state *She was thinking about Bill*. X and Y show the state at the same time (Figure 1). In Sentence (3), the participle clause X shows the state *walking along the street*, and the main clause Y shows the event *I met her*. The event Y happens at some point during the state of X (Figure 2).



Figure 1: *The process of participial construction by Hayase (1992)*



Figure 2: *The process of participial construction by Hayase (1992)*

(ibid.: 12)

In Sentence (4), the main clause Y shows the event *she went to bed*, and the participle clause X shows the state *offering a prayer*. The event Y happens after the state X (Figure 3). In Sentence (5), the participle clause X shows the state *leaving us in utter darkness*, and the main clause Y shows the event *a lamp suddenly went out*. The state X begins after the event Y (Figure 4).

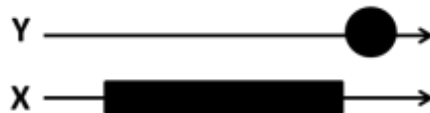


Figure 3: *The process of participial construction by Hayase (1992)*



Figure 4: *The process of participial construction by Hayase (1992)*

(ibid.: 13)

In Sentence (6), the participle clause X shows the event *looking back*, and the main clause Y shows the event *she threw a kiss to me*. These two events happen simultaneously (Figure 5).

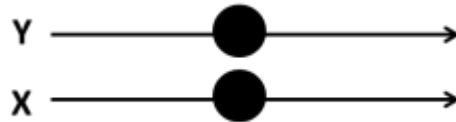


Figure 5: *The process of participial construction by Hayase (1992)*



Figure 6: *The process of participial construction by Hayase (1992)*

(ibid.: 14)

To sum up, in all situations in the investigation, the main clause arises in the temporal range of the participle phrase (Figure 6). It follows that we can find simultaneity between the main clause and the participle clause.

We find two problems in this study, however. First, it does not examine what determines the meaning of a participial construction sentence. In addition, it does not mention how Japanese use this construction in English.

2.2. Consideration

Two purposes of this chapter are to clarify how the meaning of a participial construction without conjunction is determined and how Japanese students construe participial construction. In this research, we classify the meanings of participial construction into six groups; *time*,

reason/cause, attendant circumstance, condition, concession, and idiom, following Sugiyama (1998). To give a classification of the several meanings of the participial construction is common for textbooks used in Japanese high school English education, like *Crown* (2012)

2.2.1. The Differences between Preposing and Postposing

To begin with, we examine conditions which determine the meaning of participial construction by comparing preposing and postposing. To observe the problem, the present study collected examples of participial construction used by native speakers from CEENAS.

Table 1 shows which usage is used most among the 6 usages of participial construction, i.e., *time, reason/cause, attendant circumstance, condition, concession, and idiom*, following Sugiyama (1998). The present study classifies the examples by considering the context of each sentence. And Table 2 shows which usages are preposed or postposed.

Table 1: *The classification of examples used by native speakers*

time	reason/cause	attendant circumstance	condition	concession	idiom	sum
14	2	13	6	0	0	35

Table 2: *The classification of preposing and postposing expressed by native speakers*

	time	reason/cause	attendant circumstance	condition	concession	idiom	Sum
Preposed	1	2	1	5	0	0	9
Postposed	12	0	10	1	0	0	23
parenthesized	1	0	2	0	0	0	3
Sum	14	2	13	6	0	0	35

2.2.1.1. The Meanings of Preposed Participle Clauses

We can observe from Table 2 that the participle clauses expressing *reason/cause* and *condition* are mainly preposed. Sentence (7) is an example that expresses the meaning of *condition*. In this sentence, the preposed participle clause shows the precondition of the main clause. Likewise, we may say that the participle clause which shows *reason/cause*, as shown in Sentence (8), is the precondition for the main clause.

(7) Speaking of work, I have had to give up a few jobs because of smoking in the workplace.

(8) Being financially independent, students are not relying on their parents. (CEENAS)

2.2.1.2. The Meanings of Postposed Participle Clauses

We can also conclude from Table 2 that the meaning that shows *time* and *attendant circumstance* tend to be postposed.

As for the usage that shows *time*, 11 sentences in 12 occurred with either the conjunction “*when*” or the conjunction “*while*.” This usage is idiosyncratic in participial construction

because it specifies the relation between the main clause and the participle clause by using a conjunction, as shown in Sentence (9) and (10).

(9) It is important that universities consider this fact when setting course work, and should try to be flexible with lectures, meetings, and such.

(10) But, I strongly believe that working a part time job while studying is necessary for development of time management skills. (CEENAS)

Hence, we can say that this usage is unusual for participial construction, but we still have to consider the conditions in which these expressions are used. We investigate this topic in Chapter 3.

As for the *attendant circumstance* usage, nine sentences of 10 express the meaning of *soshite*². To take Sentence (11) as an example, the state of the postposed participle clause (*leaving us in utter darkness*) arises after the event of the main clause (*A lamp suddenly went out*).

(11) A lamp suddenly went out, leaving us in utter darkness. (=5)

2.2.1.3. Summary of the Differences between Preposing and Postposing

We have clarified that the preposed participle clause makes *ground* of the postposed main clause by expressing the precondition. This structure is the main concept of participle construction.

On the other hand, as we examined above, the postposed participle clause sentences were

²“*Soshite*” is a Japanese word which is equivalent to “and then” or “after that”.

expressed with the conjunctions, “*when*” or “*while*.” This example is an unusual usage of participial construction. Another example expressed by the postposed participle clause shows that it exhibits the event or state which arises from the event or state of the main clause and we could define this meaning as *sequence*.

As for *attendant circumstance* and *time*, which shows simultaneity, the order of the clauses is not considered because the temporal order does not matter in those sentences.

We found some apparent exceptions which do not violate this concept. Sentence (12) may seem to contradict the main concept of participial construction that we discussed above.

(12) I was lying in bed, watching TV.

(Watanuki and Petersen 2011: 169)

Though the participle phrase is postposed, the state of *lying in bed* functions as the *ground* in this sentence. The condition that the preposed sentence makes the *ground* for the postposed sentence is not violated in this example.

2.2.2. The Differences of Usage between Native Speakers and Japanese Students

From this point forward, we concentrate on how Japanese students construe the participial construction, comparing it with native speakers. A search of CEEJUS and CEENAS was performed to find the difference in meaning used by native speakers, advanced Japanese students, intermediate Japanese students, and beginner Japanese students (Table 3).

Table 3: *The classification of the examples found in the essays*

	time	reason/cause	attendant circumstance	condition	concession	idiom
native speakers (60 essays)	14	2	13	5	0	0
Advanced Japanese (80 essays)	6	0	0	4	1	7
Middle Japanese (70 essays)	6	0	5	2	0	8
Beginner Japanese (40 essays)	0	0	0	0	0	0

Table 3 shows which usage is used in the corpuses. We found four characteristics from Table 3:

(1) Beginner students do not use participial construction at all, so it may be difficult for beginner class students to use participial construction; (2) Japanese students often use idioms like “*judging from*” and “*generally speaking*”; (3) Japanese students tend not to use the meaning of *reason/cause*; and (4) *Time* is used many times. (5) Native speakers often use *attendant circumstance*. We discuss these five characteristics in the remainder of this section.

2.2.2.1. Beginner Students

As the table indicates, beginner students do not use participial construction at all. It may be difficult for beginner class students to understand participial construction.

2.2.2.2. Idiom

We also observe that Japanese students often use idioms like “*judging from*” and “*generally speaking*”. This suggests that the students take participial construction as idioms instead of using the construction to express ideas.

2.2.2.3. The Meaning of *Reason/Cause*

Japanese students tend not to use the meaning of *reason/cause*. Sentences which express *reason* or *cause* have what we might call a time lag between the main clause and the participle clause, because a preposed participle clause plays a role of precondition, as shown in Sentence (13). Perhaps Japanese students usually construe participial constructions when there is a strong simultaneity, and this can be the reason why Japanese students do not usually construe *reason/cause* participial constructions.

(13) Being financially independent, students are not relying on their parents. (CEENAS)

2.2.2.4. The Meaning of *Time*

As shown in the table, we found 14 sentences containing *time* for native speakers, and 12 sentences for Japanese students. When comparing the difference between native speakers and Japanese students, 12 of the 14 sentences by native speakers occurred with the conjunctions “*when*” or “*while*,” as shown in Sentence (14) and (15).

(14) It is important that universities consider this fact when setting course work, and should try to be flexible with lectures, meetings, and such. (=9)

(15) But, I strongly believe that working a part time job while studying is necessary for development of time management skills. (CEENAS)

In the case of Japanese students, only four sentences occurred with the conjunctions “*when*” or “*while*.” As we have seen above, this usage is idiosyncratic in participial construction because it specifies the relationship between the main clause and the participle clause by using a conjunction. Therefore, it can be said that this usage is unusual for participial construction.

To sum up, native speakers express the meaning of *time*, which shows simultaneity by exceptional usage of the participial construction. We discuss this type of participial construction in Section 3. In contrast, Japanese students express the meaning of *time* by prototypical usage.

2.2.2.5. The Meaning of *Attendant Circumstance*

In this section, we discuss the meaning of *attendant circumstance*. In Sugiyama (1998), *attendant circumstance* consists of two meanings; *nagara*³ (*while*) and *soshite* (*and then*). Examples from Hayase (1992) illustrate this concept. Sentence (2), “*Offering a prayer, she was thinking about Bill,*” expresses the meaning of *nagara*. In this example, the state of the main clause and the participle clause arise simultaneously. Sentence (4), “*Offering a prayer, she went to bed,*” expresses *soshite*. In this example, the event “*she went to bed*” happens after the state “*offering a prayer.*” In this situation, there is a time lag between the main clause and the participle clause.

To find the difference between native speakers and Japanese students in using *attendant circumstance*, we looked at the examples of *and then* and *while* usage found in CEENAS and CEEJUS. Our data, gathered from native speakers, shows that nine of thirteen sentences express

³ *Nagara* is a Japanese word equivalent to “*while*” in English.

the meaning *and then*. Sentence (16) and (17) are examples that expresses the meaning *and then*.

(16) Also, when people breathe smoke, it alters the taste of food, making it taste bad.

(17) From my own personal experience, restaurants and bars that have brought in substantial smoking bans in my own country, the air quality drastically improves, creating a much more pleasant atmosphere. (CEENAS)

In the case of Japanese students, no sentences that express the meaning *and then* were found in the five *attendant circumstance* sentences. We can see from this data that Japanese students do not use the meaning *and then*, which has a time lag between the main clause and the participle clause.

2.2.2.6. Summary of the Usages of Japanese Students

In summarizing the main points made in this section, we have found that Japanese students do not express the meaning of *cause-result relation*, which has a time lag between the main clause and the participle clause. In 2.2.2.4, we clarified that Japanese students express the meaning of *time* by prototypical usage of the participial construction, unlike exceptional usage like the participial construction with *when/while*, which is mainly used by native speakers. What we clarified in 2.2.2.5 implies that Japanese students could not express the meaning of *and then* in *attendant circumstance*, which has a time lag between the main clause and the participle clause.

The points discussed in 2.2.2 make it clear that Japanese students use participial construction sentences when the main clause and the participle clause arise simultaneously.

2.2.3. Studies of the Iconic Principle of Sequential Order

Radden and Dirven (2007) explains the iconic principle of sequential order, and we can apply this theory to the analysis we have given above. According to the study, the temporal order of events in the conceived world is mirrored in the order of clauses describing them. Sentences (18) and (19) are good examples to illustrate this theory:

(18) I saw the burglar. He ran away.

(19) The burglar ran away. I saw him. (Radden and Dirven 2007: 54)

In both examples, the first sentence denotes the first event, hence the temporal order of events is opposite.

What we clarified in Section 2.2.1 reflects the iconic principle of sequential order. The finding in Section 2.2.1 is that the preposed participle clause makes *ground* of the postposed main clause by expressing the precondition. Sentences (20) and (21) offer two examples:

(20) Turning to the left, you will see a large building.

(21) Not knowing what to say, I remained silent. (Sugiyama 1998: 417)

Sentence (20) expresses condition. In this sentence, the preposed participle clause shows the precondition of the main clause. Likewise, it may be said that a participle clause expressing reason, such as in Sentence (21), is a precondition for the main clause.

In summary, the participial constructions that denote *reason*, *condition*, or *concession* should be preposed. In other words, we argue that a precondition should occur before the event

of the main clause, reflecting the iconic principle of sequential order.

2.3. Summary

Section 2.2.1 clarifies that the preposed participle clause makes *ground* of the postposed main clause by expressing the precondition. This structure is the main concept of participle construction. On the other hand, examples expressed by the postposed participle clause shows that it exhibits the event or state which arises from the event or state of the main clause.

We can assume from the analysis in Section 2.2.2 that participial construction, as used by Japanese students, has a different tendency from that of native speakers. Unlike native speakers, Japanese students have trouble perceiving events that occurred immediately before or after the participle clause as being simultaneous.

In Section 2.3, by reflecting the iconic principle of sequential order, we argue that a precondition should occur before the event of the main clause.

3. Analysis on Participial Construction with Conjunctions

In the previous chapter, we have focused on the participial construction without conjunctions. This chapter argues the difference between participial construction without conjunctions, and participial construction with conjunctions, like Sentence (22), which according to the notion of iconicity (Bolinger 1977: 19), must differ in meaning.

(22) It is important that universities consider this fact when setting course work, and should try to be flexible with lectures, meetings, and such. (=9)

To clarify the problem, we consider the position of participle clause.

3.1. Previous Studies on Participial Construction with Conjunctions

We reviewed previous studies that deal with “the kinds of the conjunctions that precede the participial construction.”

Ando (2005) argues that the connotation of participial construction can be ambiguous because it does not contain conjunctions and needs to be construed by logical inference. To avoid such vagueness, the study continues to argue conjunctions like *when*, *while*, *though*, and *once* are added before the participle, as shown in Sentences (23) and (24);

(23) While (I was) reading, I fell asleep.

(24) When writing (I write/*I am writing) English, I often consult the dictionary.

(Ando 2005: 245)

Close (1975) argues that there are four kinds of participial construction with conjunctions and lists the conjunctions used in each kind, as shown below;

(25) Time (*when, while, after, before, since*)

(26) Conditional (*if, unless*)

(27) Manner (*by, as if*)

(28) Contrast (*although, though, while*)

(Close 1975: 92-93)

The study also explains that the conjunction of reason, such as *because*, *as*, and *since*, is unacceptable with the *-ing* clause.

Denawa (2014) analyzes participial construction with conjunctions and concludes that *while* must be added when the event of the main clause terminates the event of the participle

clause. In Sentence (29), for example, the act *A pan had caught fire after he fell asleep* terminates the event *cooking*.

(29) A pan had caught fire after he fell asleep while cooking a late-night snack.

(Denawa 2014: 296)

There are some shortcomings in Ando (2005), Close (1975), and Denawa (2014). Ando (2005) claims that a conjunction like *when*, *while*, *though*, and *once* should be added to avoid vagueness. However, the study falls short because *while* denotes not only simultaneity but also concession. Hence, the meaning cannot be defined only by the conjunction.

Close (1975) argues that we cannot form *-ing* clauses indicating reason beginning with *as*, *because*, or *since*. However, this also falls short because the study does not explain why this cannot be done. We discuss this problem in Section 3.3.

Denawa (2014) explains that *while* must be added when the event of the main clause terminates the event of the participle clause. However, this study does not examine the significance of concession. Both simultaneity and concession must be considered.

3.2. Consideration of Participial Construction with Conjunctions

3.2.1. Participial Construction with the Conjunction *While*

This section examines participial construction with the conjunction *while* by using iconic principle of sequential order. The conjunction *while* has two meanings, concession and simultaneity. Section 3.2.1.1 deals with participle clauses indicating concession, and 3.2.1.2 addresses those indicating simultaneity.

Examples from COCA were collected through three steps. First, five participles were chosen that are frequently used in participial construction with the conjunction *while*. Second,

the participles' meanings were classified into two groups by the context of each example: simultaneity and concession. Sixty-five examples out of 100 show simultaneity; the rest show concession. Third, these meanings were analyzed by examining the position of the participle clause in each example.

3.2.1.1. The Position of Concession

One hundred examples were analyzed to see if the participle clause was preposed or postposed. The results are shown in Table 4.

Table 4: *Counts of preposed and postposed participial construction with while*

	simultaneity	concession
Preposed	9	2
Postposed	56	30

Table 4 shows that most of the examples illustrating concession are postposed. Sentence (30) and (31) are good examples:

(30) But, frankly, I have been supportive of the negotiations, all there while being very skeptical that Iran will actually agree to it.

(31) I remembered that Willy could be clumsy, dropping books, loosing pencils, forgetting jackets, bumping into things, even while being an outstanding student. (COCA)

If the explanation in Section 2.2.1.3 is followed, a participle clause that shows precondition should be preposed. However, the data here shows the opposite tendency; the

position of the participle clause of concession is likely to be postposed when the conjunction *while* is added.

3.2.1.2. The Position of Simultaneity

The participial construction of simultaneity can be further classified into two types, as shown in Figures 9 and 10:

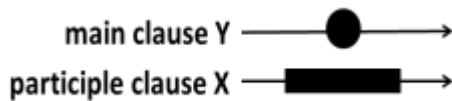


Figure 9: *The image schema of Type A (non-interchangeable)*

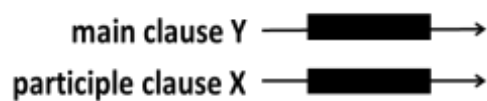


Figure 10: *The image schema of Type B (interchangeable)*

These schemas define two aspectual classes of simultaneity. The arrows stand for the passage of time, the rectangles represent states or events that last for a while, and the circle indicates a temporary event. The following sentences serve as examples:

(32) A handful of others will die while waiting for a liver, heart, lung, pancreas, or for bone marrow.

(33) This time, Lisbeth goes after the NSA while trying to protect a traumatized boy with autism. (COCA)

Sentence (32) is an example of Type A. The participle *waiting* in the participle clause expresses the state and the verb *die* expresses the event. In this example, the participle clause makes *ground* of the main clause. In contrast, Sentence (33) represents Type B. The participle *trying*

expresses the state and the verb *goes* represents the event, which lasts for an indefinite time. In this example, the event of the main clause and the state of the participle clause last for the same length of time. From this viewpoint, one might say that the main clause and the participle clause are interchangeable. Therefore, in this type, the position of the participle clause is not important.

When Table 4 is further classified into these two types, the results are shown in Table 5.

Table 5: *The sub-classification of simultaneity into two types*

	simultaneity	
	A (non-interchangeable)	B (interchangeable)
preposed	1	8
postposed	43	13

There are two striking points about Table 5. First, 43 of 56 postposed sentences are Type A (non-interchangeable). Second, although there are nine examples of preposed clauses, eight of these sentences are Type B (interchangeable). Because Type B is interchangeable, as the table suggests, we can say that most of the participle clauses showing simultaneity are postposed. This result tells us that a postposed participle clause makes *ground*, in other words, serve as a precondition. The reason why the participle clause which shows precondition is postposed is the conjunction *while* functions as a marker of the reversal of the clause position.

3.2.2. Participial Construction with the Conjunction *When*

In the previous section, we clarified that, in the participial construction with *while*, precondition is postposed and simultaneity is not affected by the position. This section examines the participial construction with the conjunction *when* considering what we clarified in the previous section.

We began by collecting examples from COCA. The five words most frequently used were chosen and we collected data with those chosen participles. We classified the sentences depending on preposing and postposing. The results are shown in Table 6:

Table 6: *Counts of preposed and postposed participial construction with when*

	<i>Using</i>	<i>working</i>	<i>making</i>	<i>considering</i>	<i>talking</i>
preposed	4	5	5	7	4
parenthesized	0	2	0	0	1
postposed	16	13	15	13	15

As Table 6 indicates, we could hardly find a difference between preposing and postposing. We can attribute this fact to our explanation; this result may occur because *when* implies simultaneity and the meaning is not affected by the position of the clauses.

Although the position of the clauses usually does not matter in the participial construction with *when*, there are some rare cases such as (34) that must be postposed; by adding specific adverbs, the meaning of *when* is specified and needs to be postposed:

(34) And, of course, her alcoholic husband, Arthur, is a liar, especially when talking to Helen.
(COCA)

In Sentence (34), the meaning of *when* is specified by the adverb “*especially*.” The meaning of *when* is construed as “condition” rather than “simultaneity,” because the adverb “*especially*” shows the specific situation.

The kinds of adverbs which precede the participial construction with *when* are shown in Table 7. We chose the adverb which showed specific situation and checked whether the participle clause is preposed or postposed. The results are shown in Table 8.

Table 7: *The Adverbs which Precede the Participial Construction with When*

<i>Using</i>	<i>working</i>	<i>making</i>	<i>considering</i>	<i>talking</i>
<i>especially</i> 11	<i>especially</i> 10	<i>especially</i> 5	<i>especially</i> 22	<i>especially</i> 10
<i>particularly</i> 5	<i>particularly</i> 8	<i>only</i> 1	<i>particularly</i> 10	<i>particularly</i> 2
<i>only</i> 3	<i>usually</i> 1	<i>hence</i> 1	<i>also</i> 2	<i>often</i> 2
	<i>just</i> 1	<i>even</i> 1	<i>thus</i> 1	<i>sometimes</i> 2
	<i>also</i> 1		<i>only</i> 1	<i>only</i> 1
			<i>at least</i> 1	<i>at least</i> 1
total 19	total 21	total 8	total 37	total 18

Table 8: *The Classification of Preposing and Postposing*

	<i>Using</i>	<i>working</i>	<i>making</i>	<i>considering</i>	<i>talking</i>
	<i>especially</i> 11	<i>especially</i> 10	<i>especially</i> 5	<i>especially</i> 22	<i>especially</i> 10
	<i>particularly</i> 5	<i>particularly</i> 8	<i>only</i> 1	<i>particularly</i> 10	<i>particularly</i> 2
	<i>only</i> 3			<i>only</i> 1	<i>only</i> 1
	total 19	total 18	total 6	total 23	total 13
Preposed	1	3	0	0	1
Postposed	18	15	6	33	11

Table 8 shows that most of the examples are postposed, and, if the meaning of *when* is

construed as “condition” by adding the adverbs, the participle clause is postposed.

3.2.3. Summary

As explained above, in the case of *concession*, which shows precondition, the participle clause with the conjunction *while* is mainly postposed. This result implies that the order of the participle clause and the main clause is opposite when the conjunction *while* is added. As for *simultaneity*, when the participle clause is not interchangeable, that clause shows precondition and hence is postposed. Alternatively, when the participle clause is interchangeable, the events of the participle clause and the main clause denote pure simultaneity. Therefore, the order of the participle clause does not matter, and the clause is either preposed or postposed.

In the case of a participial construction with *when*, the position does not matter because *when* itself shows “simultaneity.” However, if the meaning of *when* is construed as “condition” by adding specific adverbs, the participle clause is postposed.

3.3. Participial Construction with the Conjunction of Reason

As we noted in Section 3.1.1, according to Close (1975), a conjunction of reason (e.g., *because*, *as*, and *since*) is unacceptable with the *-ing* clause. We can provide reasonable explanations for this problem from the viewpoint of syntax and semantics.

3.3.1. Syntactic Approach

First, we do not have to take *as* and *since* into consideration because they have the usages of preposition, as shown in Sentence (35).

(35) Since leaving school, I have never met George again.

(Close 1975: 92)

Therefore, *as* and *since* can be preposition and *-ing* is regarded as a gerund, not as a participle. Here we focus on the conjunction, so we only consider the participial construction with the conjunction *because*.

To analyze why *because* is not used with *-ing* clause syntactically, we need to consider three-fold distinctions. The distinction described by Quirk et al. (1985) is shown as follows:

ADJUNCTS are similar in the weight and balance of their sentence role to other sentence elements such as subject and object.

SUBJUNCTS have in general a lesser role than other sentence elements; for example, they have less independence, both semantically and grammatically, and, in some respects, are subordinate to one or another of the sentence elements.

DISJUNCTS, by the same analogy, have a superior role when compared with sentence elements; they are syntactically more detached, and in some respects 'superordinate', in that they seem to have a scope that extends over the sentence as a whole.

(Quirk et al. 1985: 613)

By applying this distinction, the study explains that *because*-clauses indicate a cause or reason so essential that they are integrated into the sentence as adjuncts.

The participial construction has less meaning than adjuncts because the meaning the participial construction has is limited to *precondition*, *simultaneity*, and *sequence*, as shown in section 2.2.1.3. The subordinate meaning is determined from the context. Using *precondition* as

an example, the subordinate meanings, such as *reason*, *condition*, and *concession*, are interpreted from the context. However, *because* has a strong meaning, since it only has the meaning of *reason* but not *condition* or *concession*. Hence, the participial construction is incompatible with adjuncts, and we may reasonably conclude that this is the reason why the conjunction *because* is not used with the participial construction.

3.3.2. Semantic Approach

We can provide an explanation of semantic approach that is similar to the explanation of syntactic approach. The point of argument here is that *because* has strong meaning and that is why *because* is incompatible with the participial construction.

According to Ando (2005), major conjunctions that introduce a reason clause are *because*, *since*, and *as*. The study also explains that *because* is used when “reason” is the most important part of the sentence.

The meaning of the participial construction is ambiguous, so the meaning of *reason* is not emphasized in the sentence. Because the participial construction does not want to highlight each meaning, *because*, which has a strong meaning of *reason*, is not compatible with the participial construction.

4. Conclusion for Chapters 1- 3

This paper has analyzed participial construction with conjunctions and participial construction without conjunctions.

We may, therefore, reasonably conclude that the preposed participle clause makes *ground* of the sentence which expresses the precondition of the main clause. This usage is the main concept of participle construction without conjunctions. As far as the difference of participial

construction usage between native speakers and Japanese students, participial construction usage used by Japanese students (Figure 8) has strict simultaneity compared to that of native speakers.

This paper has also tried to answer the research question: “What is the difference between participial construction without conjunctions and participial construction with conjunctions?” We clarify the question using the conjunctions *while* and *when* in the following three steps.

First, it was argued in Section 2 that participial construction without conjunctions implies precondition, like *reason*, *condition*, and *concession*, and that these participle clauses should be preposed.

Second, this study analyzed participial construction with the conjunction *while*. These participle clauses have been shown to have two meanings, *concession* and *simultaneity*, which has two sub-categories: interchangeable and not interchangeable. Precondition, which is considered here as *concession* (not interchangeable), is postposed. The conjunction *while* is the marker of the reversal of the position. In the case of pure simultaneity, defined here as Type B (interchangeable), the participle clause can be either preposed or postposed.

Third, this study has argued the participial construction with the conjunction *when*. The position of the participle clause does not need to be argued because *when* shows simultaneity. We still have to consider the exception (i.e., the construal of *when*). If the meaning of *when* is construed as *condition* by adding specific adverbs, the participle clause is postposed.

5. The Educational Effect of our Teaching Model

This chapter shows that our cognitive linguistics (CL)-based findings from Chapters 1-3 are effective for Japanese EFL learners. First, we review the participial construction in current textbooks and grammar books. Second, we show the overview of the experiment we conducted.

Third, we inspect our results and check their validity.

5.1. The Present Situation in English Education

5.1.1. The Participial Construction in Current Textbooks

In *Crown* (2012), a textbook used most in Japanese high school English education, the participial construction is taught only as follows:

<Participial Construction>

Adverbial usage of *V-ing*, which expresses *attendant circumstance*, *time*, and *reason*.

(36) You did a lot of fieldwork, observing chimpanzees in the wild.

<*attendant circumstance*>

(37) I was reading a book on the train, listening to music. <*attendant circumstance*>

(38) Walking out of the door, I felt the first drops of rain. <*time*>

(39) Feeling tired, I went to bed earlier than usual. <*reason*>

(*Crown* 2012: 90) (translation mine)

The textbook only explains the usage of the participial construction and list some examples.

5.1.2. The Participial Construction in the Current Grammar Books

In *Forest* (2007), one of the most popular grammar books used in Japanese high school English education, the participial construction is explained as “a participle clause which adverbially provides additional information” (*Forest* 2007: 215) (translation mine).

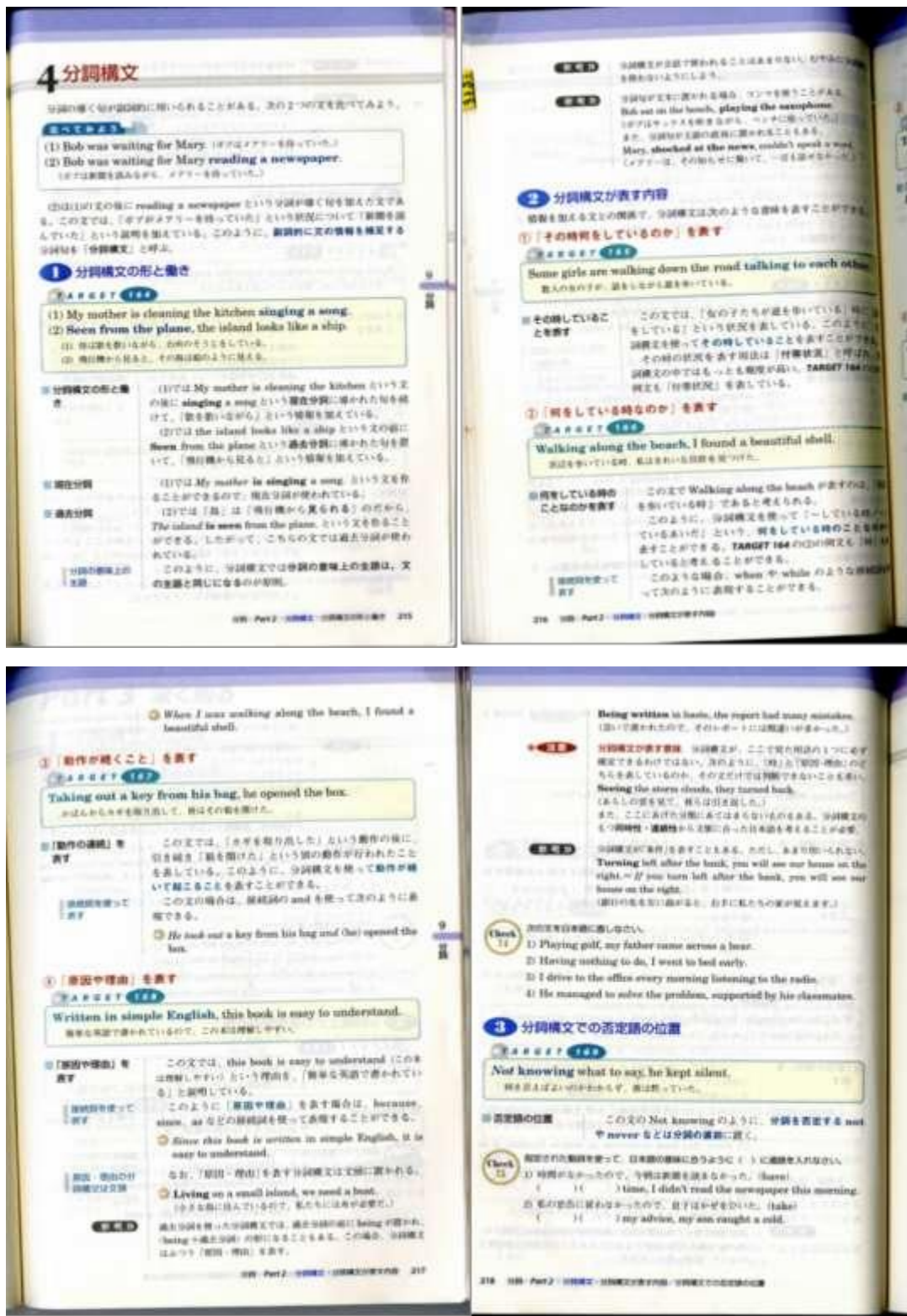


Figure 11: The Participial Construction in the Grammar Book for High School

[Forest (2007): 215-218]

As shown in Figure 11, *Forest* (2007) lists the meanings and examples of the participial construction. It does not explain the order of the participle clause.

Section 5.1 reviewed how the participial construction is treated in school textbooks and grammar books. Here, problems in acquiring the participial construction arise: (a) Students hardly understand the differences between preposing and postposing of the participle clause, and (b) students struggle to memorize the meanings of the participial construction because it has several meanings, as shown in Figure 11.

5.2. Methods

This study has conducted an experiment in order to show the effectiveness of the teaching method based on our findings in Chapters 2-4. This study adopted two research methods, quantitative study and qualitative study, following Fujiwara (2017): namely, language tests and a questionnaire. We wanted to investigate the effectiveness of the new CL-based teaching method for the participial constructions and the learners' preference for the new teaching method. The language tests consisted of pre-test, treatment, and post-test, and the questionnaire was completed after these tests.

5.2.1. Participants

The present study experimented with the students in a class of “An Introduction to English Linguistics” at Shinshu University in Japan, which meant that most of the students were keen to study English because they are interested in English. The demographic data elicited via the questionnaire are summarized in Table 9.

Table 9: Demographic Data of the students

Items		Values
Gender	Male	12
	Female	23
	Unanswered	1
	Sum	36
Average age		19.97
Average years of English education		9.19
Self-assessment of English ability	Very high	0
	High	5
	Mean	15
	Low	12
	Very low	2
	Unanswered	2

The demographic data is useful to obtain a general picture of the participants. There were more female than male participants, with 12 male participants and 23 female participants, including an unanswered participant. The age group of the participants was 18 to 25 years old, and the average age of all participants was 19.97 years. The average years of English education of the participants were 9.19 years, and this shows that the participants, on average, had experienced a longer duration of English education than the six years of compulsory English education in Japan. Also, the results of the self-assessment of English ability are shown in Table 9. It is interesting that no participants assessed themselves as having very high English proficiency, resulting in most of the participants assessing their English skills as average or low.

5.2.2. The Overview of the Experiment

The class was randomly divided into two groups, and each group had different treatment after the pre-test. Group A was given an explanation about the participial construction, similar to that in *Forest* (2007), listing each meaning and providing examples. Group B was given an explanation according to our model, which is based on CL. Both the pre-test and post-test consisted of two types of questions; the first type was multiple choice question which asked for the correct usage of the participial construction, and the other was a translation from English participial construction sentence into Japanese and then translation of a Japanese sentence into an English participial construction sentence. Both types of questions help to identify whether the students understand that the order of the participle clause in the sentence is important to determine the meaning of the participial construction.

We calculated the average scores of all tests and asked the examinees to note the time needed to answer all the questions.

We then gave short lectures about each teaching model after the students completed the post-test, for ethical reasons.

5.3. The Results of the Pre-test and Post-test

Table 10 shows the results of the multiple choice questions:

Table 10: The Results of the Multiple Choice Questions

	Group A Class that was given the explanation based on the grammar books	Group B Class that was given the explanation based on our new model
Pre-test (multiple choice) Average Score	6.78	6.56
Post-test (multiple choice) Average Score	6.44	6.78
Differences	- 0.34 ↓	+0.22 ↑

The scores of Group B increased, while the scores of Group A decreased. The reason Group A's scores decreased may have been that the students were confused by several meanings listed in the explanation.

As for translation questions, we marked the answers out of four possible mark for each question. When the students failed to use the participial construction, we gave zero marks to them because the questions addressed whether the students understood the participial construction or not. We also took off a point for each grammar or word mistake. The results of the pre-test and post-test for each group are shown in Table 11.

Table 11: The Results of the Translation Questions

	Group A Class that was given the explanation based on grammar books	Group B Class that was given the explanation based on our new model
Pre-test (translation) Average Score	10.11	10.56
Post-test (translation) Average Score	13.00	13.57
Differences	+ 2.89 ↑	+ 3.01 ↑

Although the scores of both groups increased, the score of Group B showed slightly better improvement. The results of both types of questions show the effectiveness of our model.

We also compared the time that was needed to answer all of the questions. The time needed to finish the test was considerably shorter in Group B, as shown in Table 12.

Table 12: Time Needed to complete the Tests

	Group A Class that was given the explanation based on the grammar books	Group B Class that was given the explanation based on our new model
Average Time needed for Pre-test	7'59	6'56
Average Time needed for Post-test	6'55	5'37
Differences	- 1.04 ↑	- 1.19 ↑

This result shows that the students in Group B were confident in choosing the right answer, which also supports the effectiveness of our teaching model.

5.4. Results of the Questionnaire

Our questionnaire aimed to check the student's preference in teaching model, i.e. a qualitative study on data. The questionnaire comprised two parts: demographic questions, and questions about the preferred teaching model, as shown in the Appendices.

The results of the evaluation of the teaching model are shown in Table 13. The students evaluated the explanation which they were given and were asked to mark from 1 to 5 for each question. We asked eight questions; *It is clear to understand*, *It is easy to understand*, *It is useful to understand*, *It is interesting*, *It is familiar to me*, *It fits my learning style*, *How much could you keep the motivation for the explanation of the teaching model*, and *How much could you concentrate on the explanation of the teaching model?.* We calculated the average sum of their

mark.

Table 13: *The Results of the Evaluation by the Students*

	Group A Class that was given the explanation based on the grammar books	Group B Class that was given the explanation based on our new model
Average Sum for the evaluation of the teaching model	21.83	36.22

As can be seen in Table 13, it is clear that the students gave a good evaluation to our CL-based teaching model. We also asked the students *Which teaching model do you prefer*, and 31 students out of 36 answered that they preferred the CL-based teaching model. The questionnaire proved that a CL-based teaching model of the participial construction was preferable for Japanese EFL learners.

6. Conclusion

The present paper has conducted a study on participial construction with conjunctions and those without conjunctions.

We may, reasonably conclude that the proposed participle clause makes *ground* of the sentence which expresses the precondition of the main clause. This structure is the main concept of participle construction without conjunctions.

This paper has also tried to answer the research question: “What is the difference between

participial construction without conjunctions and participial construction with conjunctions?”

The conjunction *while* serves as the marker for the reversal of the position. In the case of the participial construction with the conjunction *when*, the position of the participle clause does not need to be argued, because *when* shows simultaneity. We still have to consider the exception: i.e., the construal of *when*. If the meaning of *when* is construed as *condition* by adding specific adverbs, the participle clause is postposed.

From the results of tests described in Chapter 5, our CL-based findings from Chapter 1-3 can be applied to a teaching model. We assert that our new teaching model is effective for Japanese EFL learners, improving students’ understanding of the participial construction.

Acknowledgement

I am deeply grateful to my supervisors, Prof. Miki Hanazaki, Prof. Kozo Kato, Prof. Tsukusu Ito, and Prof. Kazuo Hanazaki, who were helpful and gave me constructive comments and warm encouragement. My deepest appreciation goes to my graduate fellows in the department, especially Fujiwara Takafumi, Yamamoto Naoki, Mayumi Fujimori, Atsushi Hasegawa, Sho Fujisawa, and Katsuaki Sano for sharing their intelligence and giving me generous support. This paper would not have been finished without their knowledge and help.

References

- Ando, S. (2005). *Gendai Eibunpou Kougi [Lectures on Modern English Grammar]*. Tokyo: Kaitakusha.
- Bolinger, D. (1977). *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Close, R. A. (1975). *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Denawa, T. (2014). 'when/while ga kuwae rare ta bunshikoubun ni tsuite[On Participial Constructions Preceded by *When* or *While*]', *Bulletin of the Graduate School, Toyo University* 51: pp. 289~300.
- Fujiwara, T. (2017). 'A study on the effectiveness of grammatical teaching methods for English prepositions and learners' preference for the teaching methods: A cognitive linguistics based approach and a memorisation approach'. Dissertation as part of the MA in Applied Linguistics.
- Hayase, N. (1992). 'Bunshikoubun ni okeru Figure/Ground sei ni tsuite no ichi kousatsu (A consideration on Figure/Ground nature of participial construction)', *Osaka Literary Review* 31: pp. 10~22.
- Ishikawa, S., Maeda, T., & Yamazaki, M. (Ed.). (2010). *Gengo Kenkyu no tame no Toukei*

Nyumon [An Introduction to Statistics for a Language Research]. Tokyo: Kuroshio Shuppan.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman Inc.

Radden, G. , & R. Dirven. (2007). *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Sugiyama, T. (1998). *Eibunpou Shoukai [A Comprehensive English Grammar]*. Tokyo: Gakushu Kenshusha.

Watanuki, Y. (2000). *Roiyaru Eibunpou [Royal English Grammr]*. Tokyo: Obunsha.

Watanuki, Y. , & M. Petersen. (2011) *Hyougen no tame no Jissen Roiyaru Eibunpou [The Royal English Grammar for Practical Expressions]*. Tokyo: Obunsha.

Textbooks

Crown English Communication 1 (2012). Tokyo: Sanseido.

Sougou Eigo Forest fifth edition [*General English Forest*] (2007). Tokyo: Kitahara Shoten

Data Sources

COCA (The Corpus of Contemporary American English)

CEEJUS (Corpus of English Essays Written by Japanese University Students)

CEENAS (Corpus of English Essays Written by Native Speakers.

信州大学大学院人文科学研究科 院生会組織

院生会長 (1 名)

院生会統括(院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理)

会計 (1 名)

院生会費管理(会費徴収、物品購入、収支報告)

書記 (1 名)

記録類作成及び管理(院生会議事録、院生会活動記録)

シンポジウム委員 (1 名)

シンポジウム運営 (シンポジウム連絡、原稿集作成・配布)

広報 (1 名)

院生会活動報告 (写真撮影、院生会ホームページ運営)

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員 (1 名)

『人文科学研究』編集 (雑誌作成、投稿受付)

- 任期はそれぞれ一年間とする。
- 役員は基本的に M2 から選ばれるが、シンポジウム委員の半数は M1 から選ばれる。
- 次年度役員の選出は各年度の 1 月中に院生総会を開き、そこで行う。ただし M1 からのシンポジウム委員については年度初めの院生総会において選出する。
- 役員選出は立候補及び推薦による。
- 各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。
- 休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情の場合、各役員の交代を認める。
- 役員構成及び各役員の業務内容は基本的にこの通りだが、各年度の状況に合せた変更は可能である。

平成 29 年度 信州大学大学院人文科学研究科 院生会活動記録

平成 29 年度院生会役員
院生会長 鈴木映梨香
会計 矢澤静佳
書記 任意
シンポジウム委員 久保陽子、石川萌理
広報 任意
雑誌編集委員 伊東勇人

.....

5 月 15 日 第一回院生総会 【 於 院生室 】

議題1. 院生会組織説明

議題2. 大学院シンポジウムの説明

・M1 に向けて、シンポジウムの概要説明

議題3. 前年度会計報告

・同年度予算案

・院生会費値上げの提案

議題4. 大学院委員会への質問・要望

・特になし

.....

9 月 26 日 信州大学人文科学研究科大学院前期シンポジウム 【 於 人文ホール 】

プログラム

▽9:30-9:40 研究科長挨拶、投票方法説明、第一発表者準備

▼9:40-10:15 鈴木映梨香 『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』の図像化

▼10:20-10:55 石川萌理 マルモンテル『インカ帝国の滅亡』における 1777 年初版の序文—作品の意図について

▼11:00-11:35 伊東勇人 接続詞付き分詞構文に対する考察

▼11:40-12:15 矢澤静佳 原撰本系『類聚名義抄』の片仮名和訓について

▽12:15-13:15 昼食、懇談、投票

▽13:15-13:45 優秀発表賞表彰、大学院委員会委員長挨拶

.....

2月9日 信州大学人文科学研究科大学院後期シンポジウム【於 人文ホール】

プログラム

▽9:00-9:10 研究科長挨拶、投票方法説明、第一発表者準備

▼9:10-9:40 小川尚美 ホスピタリティ産業における英語による接客の実態
— 「おもてなし」を意識した英語コミュニケーションの考察

▼9:45-10:15 對馬康平 半実在論(semirealism)について

▼10:20-10:50 Liu Xinyi 「冬遊記」にみえる羅洪先の講学活動

▼10:55-11:25 南英明 『黄金の驢馬』におけるアリストメネース挿話の語りの
構造について

▼11:30-12:00 川合正紀 マックス・フリッシュ 『万里の長城』：啓蒙批判の原点

▼12:05-12:35 伊藤智弘 「字鏡集」 研究環境の分析

▽12:35-13:35 昼食、懇談、投票

修士論文優秀賞候補者発表

▼13:35-14:10 鈴木映梨香 『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』の注釈書

▼14:15-14:50 伊東勇人 分詞構文に対する考察

▼14:55-15:30 原撰本系『類聚名義抄』の片仮名和訓について

▽15:30-16:00 懇談、優秀発表賞表彰、大学院委員会委員長挨拶

人文科学研究科 第 15 号

平成 31 年 3 月 3 日 発行

編集者 信州大学人文科学研究科院生会

発行者 信州大学人文科学研究科委員会

〒390-8621 松本市旭 3 丁目 1 番 1 号 信州大学人文科学研究科内
